

ドイツ近代文学の成立とナシヨナリズムの誕生

轡 田 收

はじめに

ヨーロッパにおいて国民(Nation)と名づけられる集団は所与のものではなく、一定のひとびとによって国民意識(Nationalbewusstsein)が醸成されることをもって初めて成立した。すなわち、ある民族に属するひとびと、あるいは、一定地域の居住者が、自分たちには共通の伝統や利害関心があり、それが連帯の基盤を作り出している、という認識をもち始めるところから、国民意識が形成されるわけであって、それは政治および文化の二領域にまたがる集合意識である。

したがって、国民意識の形成は、同じ地域に居住しているからといって、同じ程度に、また同時に、すべてのひとびとに見られるわけではない。国民意識は、連帯感を感じさせられる動機付けに依存しており、一部の

ひとびとに根ざしたのちに、他のひとびとに次第に伝えられて行く性質をもっている。その伝播伝達には言語化が大きくあずかっている^①。

そのような事情を考えると、殊にドイツのように、政治的理由から領土の統合がなかなかなされず、そのためになをもつて「ドイツ」という基準にしうるか判然としなかった国において、言語にもつとも係わる文学の領野と国民意識形成とがどのような関連におかれていたかを考察することは、ひとつの課題となりうる。さらにここでは、言語文化の形成が他の西欧諸国に較べかなり遅れていたということが、特殊なパラメーターとして考慮されなければならないであろう。というのは、国としてのまとまりをもたぬドイツにおいては、固有の言語文化や国民意識の生成育成は、いわば自然発生的に「内」からの欲求に押され、徐々に高まってきたというよりは、むしろ遅れの意識による「外」との対比によって促進された側面が強いからである。

このような見方をするのは、いわゆる文化類型学的な見地をとろうとするからではない。同じ西欧文化圏にありながら、近代の意識とその対処の仕方に明らかに異なった態度が生じてきた端緒を捉えることが本論の趣意である。

すなわち、文学の「近代化」という点で、ドイツは他の西欧諸国と結果的に同じような表現形式やジャンルをもつに至ったが、その始まりの時期や動機を見ると、そこには明らかに相違が認められるのである。スペイン、イギリス、フランスでは、自国語による文学への移行が近代初期に比較的自然に行われたのに対して、ドイツではそのような経過をたどっていない。

たとえば、フランスにおいては、すでに一六世紀に、フランス語で詩を作り、散文を書くことが普通に行わ

れ、さらに、世紀半ば近くには「フランス詩法」が出るに及び、プレイヤード派を代表する形でデュ・ベレーは「フランス語の擁護と顕揚」を著し、「フランス語の詩が今まで以上のすぐれた詩形を作り上げられる」との所信から、フランス語論に加え詩に有効な語法を探索している。そこで俗語への顧慮が述べられていることに呼応して、ロンサールは「フランス詩法要約」（二五六五）で、かつての「物語」の古語やありとあらゆる職業で使われる言葉、あるいは方言にフランス語の美を発見し、それらをさらに詩の言葉として育て上げることの重要性を指摘している。²³⁰

ところが、ドイツでは、すでに一六世紀から、のちに「民衆本」と名付けられるさまざまな「物語」がドイツ語で書かれ、また中世以来のミンネザングの系統を引くマイスターザングもハンス・ザクスを代表として広く行われていたにもかかわらず、人文主義の立場から見た古典的文学形式から懸け離れていたために、完全に無視されることとなった。

したがって、改めて考慮の対象となったドイツ語による詩作は、日頃の言語活動の中から次第に、いわば内発的に行われるようになったのではない。すなわち、日常生活の中での世界解釈の用をなす言語に特有の美を発見して、それをさらに定型化するといった方向は生じなかった。ドイツ近代文学への道は、ドイツ語という自然言語に対する関心や愛から開けていったわけではなかったのである。

このような状況にあつて、近代ドイツ文学が成立してゆく過程と、ナショナリズムとの結びつきとを以下に論究してみようと思う。

—

近代ドイツにおける国民意識の形成の端緒は、一五一七年に始まったマルティン・ルターの宗教改革に見ることが出来る。その理由として、この運動の特徴のひとつが、反ローマの姿勢であつて、国民としての自覚を呼びかけていることが挙げられる。一五二〇年の文書『ドイツ国民のキリスト教貴族へ An den christlichen Adel deutscher Nation』は明らかに教皇制を敵として、ドイツ国民の自立を呼びかけている。

ローマ派の連中[*Romanisten*]は、はなはだ巧妙に三つの城壁を自分の周りに建てめぐらし、それで今日まで身を守ってきたので、だれも彼らに改革の手を加えることができず、ためにキリスト教界全体がおそろしく墮落してしまいました。

教皇は、「…」世襲的なローマ皇帝から帝国と称号とを奪ひ、「…」その名称と称号は、私どもドイツ人に帰属せしめられたのです。

皇帝は、たえず教皇やその一味の恣意によつて左右され、ために私どもドイツ人は名称だけしかもたず、
[…]

ドイツの皇帝をして真に、完全に皇帝であらしめよ。⁽³⁾

だが、このような運動が直ちに統一的な国民意識ないしはドイツ・ナショナリズムに結びついていかなかったことは歴史が示している。宗教上の対立が深まり、宗派間の抗争が政治的な色彩を濃くにしたがつて、

たえず新たな紛争、弾圧、追放が繰り返され、ドイツ国民という概念は政治的にも社会的にもなら纏まりを示すものではなくなっていたからである。

ただし、こうした混乱の中でも、“Nation”（国民）ないし“Vaterland”（祖国）という語そのものが言語的に浸透していったことは文献的に確認されている。その例のひとつは、一五五五年に締結されたアウクスブルクの和議の条文に見られる。

in allem dem, so dem Heiligen Reich, sonderlich dem geliebten Vaterland Teutscher Nation zu Ehren, Nutz, Wohlfahrt, und Gutem, auch Fried, Ruhe und Einigkeit erschließlich und dienstlich seyn möcht (斜体は筆者による)

神聖帝国、特にドイツ国民の愛すべき祖国の名誉、利益、福祉、善、さらに平和、治安そして統一をもたらし、またそれに役立つであろうすべてのことども^[4]

また一六世紀後半のトルコによる侵攻の危機に際しても、繰り返し愛国心と帝国の国民感情に訴えかける要請書が交付されたことによって、対外的に国民意識が醸成されていったという^[5]。だが、こうした傾向は、為政者の側がその力と立場を維持するために行った表明であつたとは考えられるが、一般人にとっては、そのような訴えかけを必要とした局面が過ぎ去れば、さほど印象には留まらないであろう。

しかしその一方で、知識階層には別種の国民意識が芽生えてきた。それを促進したのもひとつには対外的な動機であつた。すなわち、近代における、いわゆる〈俗語文学〉の成立がその誘因である。

早くも一三世紀にダンテによって自国語の模範となる文学作品をもったイタリアは特例として、一六世紀に

はすでにドイツを除くヨーロッパ諸国、スペイン、フランス、イギリス、そしてオランダでは、自国語による文学が成立していた。こうした〈俗語文学〉成立の基盤は、二つの要素から成り立っていた。すなわち、そのひとつはいわゆる〈古代人の模倣〉であり、いまひとつは当然のことながら〈俗語〉すなわち自国語を誇りをもつて使用することであつた。

〈古代人の模倣〉を推し進めたのは、ルネサンス以来、古代の再発見と復興の精神のもとで促進された人間学あるいは人文学(*studia humanitatis*)であつた。古典文献の研究と真正ラテン語を指標とした新ラテン語の詩作の分野においてならば、ドイツの人文主義者たちはヨーロッパ共通の基盤に立ち、歩を同じくしていたばかりか、むしろ優位を保っていた。しかし、彼らは新たな文学傾向を前にすると、顕示しうるものをもたなかった。ドイツ人は土俗的な言語作品にはこと欠かなかつたものの、ラテン的伝統の中から誕生した新たな文学は未だなく、後進性を意識せざるをえなかつた。古典詩学に則つた自国語による作品の欠如は、ただ単に制作に遅れをとつたということばかりではなく、自国の言語ドイツ語がそうした詩法には向かないという考えを生み出したし、またそのような指摘を外からうけもしたからである。フランスではデュ・ペレーが早くも一五四九年に、『フランス語の擁護と顕揚』をもつて、以後にぎやかになる近代詩論、フランス語論の先鞭を付けている、そのような時代であつた。

こうした状況をとらえて、これまでのドイツ文学史研究においては、一六世紀末から一七世紀にかけて、文学の領域で「愛国主義的潮流」ないし「文化愛国主義」と呼びうる現象が顕著になつたという議論がなされている。

本論では、こうした内容にかかわる当時の文学論および文学傾向に特徴的な言説を、まずオーピツを中心にとりあげ、ドイツにおける自国語文学形成の動機とその推移を検証しようと思う。すなわち、歴史におけるいわゆる後史の立場から見ても、一七世紀はたしかにドイツ語による文学成立期であるが、それははたしてどのような意識をもつて、どのような範囲で、あるいはどのようなひとびとによって達成されたのかを明らかにすることが目標である。それは、ドイツ語文学はこの時代の社会における共通の価値領域でありえたのかという問いでもある。それによって同時に、過去にあった〈事実〉のより正確な認識ばかりではなく、それを評価し、媒介した研究法にもなっていたバイアスも捉えられることであろう。

すなわち、愛国主義的傾向に着目している見解は、研究が行われたころの時代状況を反映するところが大きく、今日から見ると、意識的無意識的に研究者(たち)のおかれた社会全体の関心が研究対象に投影されていることが明確に見えてくる。すなわち、そのような言説からは逆に、一九世紀七〇年代以降のドイツ帝国建国にともなうて生まれた自信や昂揚に同調した国民的(national)な、すなわち国家主義的(nationalistisch)な意識に裏付けられた認識関心がうかがえてくるのである。

その例をいくつか挙げるならば、Heinrich Schultz, *Die Bestrebungen der Sprachgesellschaften des XVII. Jahrhunderts für Reinigung der Deutschen Sprache* [一七世紀の言語協会がドイツ語浄化のために行った努力] (二八八八) は、言語ばかりではなく、「祖国」の幸せのために(zum Heile)「不必要な外国語を除去する」運動の始まりを一七世紀の言語協会に求めている。あるいは、一九六四年に無改訂第三版(dritte, unveränderte Auflage)が出たBruno Markwardt, *Geschichte der Deutschen Poetik* [ドイツ詩学史]

第一巻(Berlin: W. de Gruyter)の初版は一九三六年であつて、その第一部は「バロック詩学 Die Poetik des Barock」は「Kulturpatriotische Grundlegung und Abwandlung」[「バロック詩学。文化愛国主義的基礎づけと変容」という章から始まる。マルクヴァルトによると、バロック詩学に共通しているのは、「文化愛国的指導理念(kulturpatriotische Leitidee)であつて、この時代の「詩学の目指すところはすべて、いたるところに指摘できる努力に根ざしている。すなわち、ドイツ語が詩語に適していること、いや、できれば「詩語として」優れていることを立証し、また裏付ける努力である」(S.52)という。

あるいは、モノグラフィイの中からひとつ取り上げるとすれば、F.W. Wentzlaff-Gegebert, Dichtung und Sprache des jungen Gryphius. Die Überwindung der lateinischen Tradition und die Entwicklung zum deutschen Stil. Berlin: W. de Gruyter 1936; 1966がそれである。青年グリューフイウスの詩と言語の特性を「ラテン的伝統の克服とドイツ的文体への展開」に見るといふのである。因みにこの著者ヴェンツラフ・エゲベルトは、近年編纂したSammlung Metzlerの「Gryphius」では、このことに「一切言及していない。

これらの研究書に共通して見られるのは、ドイツ語への関心と傾斜がいかにも全時代的、全社会的に生じてきたかのような見解である。問題はむしろ、一七世紀の言語論や詩学、特にいわゆる「序文詩学 Vorredepoetik」に恒例となっている「愛国的」言辞の評価にかかわっている。すなわち、排他的にいわゆる「国語純化」を行うことに意義をおいていたのか。また、ラテン的伝統が克服されるべき対象と考えられていたのか。あるいは、ドイツ語ないしドイツ詩は独自の国民的な性格をもち、大いに推奨されていたのか。このような点を詳らかにして初めて、ドイツ近代での新たな文学の開始の動機と、国民意識成立との相関関係が見定められる

ことであろう。

二

一六世紀においてもドイツ語で詩や物語、あるいは演劇が書かれていたとはいっても、そのドイツ語は俗語であつて、そうした作品は、文化教養言語(Bildungssprache)ないし学識言語(Gelehrtensprache)としてのラテン語による文学とは異なる娯楽と見られていた。そしてその上で、一六世紀と一七世紀とは、今日でこそドイツ文学とひとまとめにしているが、実態においては、その形式、形態、さらに生産および受容の意識において、画然とした相違が見られる。すなわち、一六世紀文学も、そのひとつの特質として、自国語ないしは〈民族民衆語〉(Volksprache)を用いて作られている点では、近代文学たる要件を満たしていたとも考えられるが、ヨーロッパの水準で考えられる「近代文学」としての重要な条件である形式と内容においては、依然として〈土俗的民衆的〉(volkstümlich)なレヴェルに留まっていたことが、両者を分つ特徴となっている。

このような文学状況を、ラテンの伝統の文脈から捉えてみると、修辞学および詩学の基本原理である〈ものとことば res et verba〉の関係からも、一七世紀に至るまでは、ドイツ語そのものの状態は〈近代化〉を迎えていない段階にあつたと言える。オーピッツの『ドイツ詩書』Das Buch von der deutschen Poeterei(1624)の第五章(「ドイツ詩の特徴、第一に inventio すなわち着想およびわれわれが書き記そうと思ふ事柄の dispositio すなわち排列について」)は、次のように始まる。

Weil die Poesie/ wie auch die Rednerkunst/ in dinge und worte abgetheilet wird.[...]」

詩は弁論術と同じく、もの「事柄」と言葉に分けられるがゆえに、最初に、事柄の着想と分類について、次いで、言葉の仕上げと飾り（*ziehen*）「…」について述べようと思う。

事柄の着想は、われわれが思い浮かべることで済むすべてのもの、すなわち、天上や地上にあり、生命あるものないものすべてのうち、詩人が書き記し、作品にしようと企てるものを、明敏に捉えることにはかならない。「…」この着想には直ちに排列が係わっている。排列は、着想した事柄を適切かつ優美に整える役割をもつ。

「バロック詩学」を論評している研究書のほとんどは、〈ものごとことば〉論を修辞学の伝統の中でのみ見ており、近代ドイツ語生成期のコンテクストでは捉えていない。しかし、オーピツの言説は、これに先立つ第四章「ドイツ語の詩について」で、ドイツ語によつて詩を作るべき必然性、すなわち、ドイツ語詩の存在価値を論じていることとの連関で考えるのが正当であろう。第四章は以下のように結ばれている。

とにかく、イタリアにおいても、ペトラルカが初めて詩を母語で行うようになったのであるし、ロンサルが行ったのはそれほど昔のことではない。ロンサルについて言われていることであるが、彼はフランス語をできるだけ巧みに表現できるように、ギリシア人の書に丸一二年没頭したということである。というのは、これらの書からこそ、詩はその大部分の業、技法、そして魅力をえているからである。そこで、私はじつにこの機会を捉えて、臆することなく、以下のことに注意を喚起しておかないわけにはゆかない。すなわち、だれであれ、われわれの言葉であるドイツ語の詩作に取り組もうと思うのであれば、生来の詩

人でなければならぬことはいうまでもなく、ギリシアおよびラテンの書物に通曉しており、そこから正しい技法を学びとっているのであれば、私はそうしたドイツ語の詩作は無益な業と思う。そしてまた、本来は詩作に必要とされ、そして私がいまから簡単にふれようと思っているすべての教えも、そのようなひとにあつては、なんら役に立つことはありえないのである。(16f.)

したがって、「われわれが思い浮かべるこのできるものすべて」、「書き記し、作品にしようと企てるもの」といつても、詩人は恣意的に選びとれるものではなく、「ギリシアおよびラテンの書物に通曉し」た学識と教養を前提としているのである。着想ないし考案(*invento; Erfindung*)に関するこのような思想は、近代ラテン語修辭学では、すでに一六世紀に確固とした原則となっており、イエズス会士であり、ルイ一三世の聴罪司祭であつたニコラス・カウシーヌス(*Nicolaus Causinus*)はその『雄弁術 *De eloquentia*』(1534)で着想論を展開するに先立つて、“*nutrix inventionis eruditio est*”(着想の乳母は学識である)と規定している⁽¹⁾。

それゆえ、詩作に当たっては、天才美学以降の産出過程とは異なり、まず「書き記し」たいと思うことを、どこに探し求められるかという課題がある。これは修辭学で、〈記憶ないし想起による発見〉といわれることであつて、発言に適した考えは、発言者にとっては明確ではないがすでに〈ものの貯蔵—想念の豊かな *copiarum*〉としてあり、記憶術の習熟で呼び覚ましたり、いつでも使用に耐えるように準備しておくような事柄である。貯えといわれるように、記憶は一種の空間としてイメージされていて、その個々の場(*topoi; loci*)に想念が区分けされている、と説かれる。どこになが、という問いは、一二世紀からヘクサメターの形で伝えられている。すなわち、

quis, quid, ubi, quibus auxiliis, cur, quomodo, quando?

だが、なにを、どこで、なにを用いて、なぜ、どのように、いつ。

の七種類を基本として構想が練られることになっていた。

しかもその次の段階「排列」においては、「考案した事柄をそれにふさわしく優美に整え」ることが求められる。着想を表現することには、その内容にとつての「ふさわしさ」「適切さ」(Angemessenheit; *aptum; decorum*)がそなわっていないければならないわけで、オーピッツの詩論では別個に扱われているが、取りあげる素材や対象にふさわしいジャンルと文体の選択が行われる。「適切さ」の法則は、言語表現の正しさ、すなわち、そこで用いられることばが、その価値と重みの点で、表現されることやものに対応していることを求めるのである。

それに加えて、この時代では、社会の身分制的分化がこのアプトゥム理論に影響を与えている。すでに一六世紀の修辞学と特に書簡指南書(Briefsteller)では、文章面における社会的な序列の表現が明確に規定されており、身分と行動と言語との釣り合いが指示されていた。オーピッツの詩書も、スカーリゲル(Julius Caesar Scaliger, *Poetices libri septem* 詩学七書)に倣ったと言われるが、特定のジャンルは特定の身分と特定の題材に対応し、その言語表現も「ふさわしさ」の観点で規定されている。

悲劇は、荘厳な点で英雄詩「叙事詩」に相当し、身分の低いものや卑俗なことの登場を許すのは稀である。なぜならば、悲劇は、王者の意志、殺害、絶望、子殺し、父殺し、火災、近親相姦、戦争と反乱、悲嘆、泣き叫び、嘆息といったことのみを扱うからである。[...]

喜劇は、平俗な事柄と人物を内容とする。語られることは、婚礼、宴会、戯れ、下僕のごまかしやずる賢さ、ほら吹き、傭兵、恋のさやあて、若者の軽はずみ、老人の吝嗇、女衒等々、日々庶民の中で生じていることでもある。それゆえ、今日喜劇を書いているものは、大きな間違いをしているおり、皇帝や貴顕を登場させている。なんとすれば、かかることは喜劇の規則に真つ向から反しているからである。

(S.20)

田園詩あるいは羊飼いの歌は、羊、山羊、種蒔き、収穫、植物、漁労、その他の野良仕事を語り、語る内容はすべて普通は、恋、結婚、死、恋のさや当て、祝祭といったことを、ひなびた素朴な調子で表現する。(S.21)

文体論に関しては、『ドイツ詩書』第六章の末尾で、次のように述べられる。

とにかく、われわれの書き記す事物はそれぞれ互いに異なるものであるから、ひとつひとつのものには、固有で他のものとは異なつた性格あるいは目印が欠かせない。すなわち、国王には「臣民とは」違つた衣装が、平民にはそれと違つたものがふさわしい、戦士はこう、農夫は別の、商人はまた別の様子をすべきであるように、あらゆることを一様に語つてはならない。低い事柄は素朴な、高いことは品位ある、普通のことは節度ある大き過ぎず平俗に過ぎない言葉を用いなければならない。

低い詩の内容には素朴で平俗なひとびとが取り入れられる。例えば喜劇や牧人の会話である。それゆえ、彼らにはそれにふさわしい簡素で素朴な語り方を当てて詩作するのである。(S.30)

これに対して、神々、英雄、国王、君主、都市等々が扱われる重要な事柄においては、品位のある、豊

かで激しい表現を行い、単に事柄を名ざすだけではなく、華麗で高尚な言葉をもって言い替えなければならない。(S.32)

人文主義を経て受け継がれたラテン的伝統をほとんど完全に引き継ぐ詩論であつて、理論的には説得力をもっていたが、ドイツ語の領域では、それを実現する態勢はまだ整っていないかつた。『詩書』第六章（「言葉の仕上げと優美さについて」）の冒頭で、オーピッツは詩に用いるには「言葉が純粹で判明で」なければならず、「純粹に語ろうとするには、標準ドイツ語と呼ばれるものに極力可能な限り従い、誤つた語り方がなされる土地の言葉を書き言葉に混用しないように努めなければならない」と説明するが、その趣意たるや、「たとえば、es geschahと言わず、es geschach' er saheの代わりに、er sach' sie habenではなく、sie han等々と言うような」ことがあつてはならないと述べなければならぬ状態であつた。まして、〈想念の豊かさ〉に対応した〈ことばの倉庫〉が用意されているわけではない。それは「一五年この方、わが国語を顕揚してきて、かくも立派な骨折りの勤勉によつて今やそれを堂々たるものにしたものにしたわが国の現代作家たち」と、ロンサルが一五六五年の『フランス詩法要約』に言ひえたようなフランス詩の段階にも達していなかつた。ロンサルがフランス語による詩作を背景に、詩的技法の向上を目指して語っていたのに対して、オーピッツは今初めて先進諸国で慣用となっている詩型に合うドイツ語表現を模索し、さらに韻律法も策定しなければならない状態にあつた。彼以前のドイツ語作品は、存在するにはしたけれども、詩法の規則には当てはまらず、新たな韻文作品を作るにあたつては模範とならなかつたのである。

そしてまた、一六世紀にあつては、ドイツ語はおよそ文芸には向かないという考えすらあつた。たとえば、

ドイツの新ラテン語詩人として名高いツェルティス(Conrad Celtis, 1459-1508)などは、ドイツで詩を作るにはドイツ語はむしろ邪魔なもの、とすら言い切っていたのである。ドイツ語には「知性がなく」、「野蛮人の声」にすぎない。したがって、ドイツに詩神アポロを招来するにはラテン語をもつてするしかない。

私たちの国はまだ粗野ではありますが、堅琴の音とともに
来たり訪れて下さい。

この蛮人は、荒々しい戦士か
農夫を先祖にもち、ローマ人の優美の業を
まだ知りませんが、あなたの指導のもとに
今や詩作を学ぶのです。[…]

来て下さい、このように私たちは祈っているのです、
私たちの岸边に。かつてあなたがイタリアの国を訪れたように。

蛮人のことは逃げ去り、あらゆる不明は
なくなればよいのです。⁽⁸⁾

このような言語・文学状況にあつて、〈遅れてきた国民〉はどのような道をとつてヨーロッパ近代文学の周期に同調するようになったのかを詳らかにすることが、次の問題である。

三

一六世紀末からドイツ語によって、新ラテン語詩と同じような内容の詩を作ろうとする動向はあった。しかし、天才的な詩人の出現がなかったばかりか、すべての詩人は、詩作原理や歴史的理念を拠り所としていなかったために、ドイツ語を用いた詩作に格別の進展はなかったのである。そのような閉塞状況を打開したのがオーピツであった。それに至る動機は、彼がボイテン(Beuten)のギムナジウム勉学時代、オランダのヘインシーイス(Daniel Heinsius)のような自国語によって成功した詩作品に触れたことにあるようである。その地を離れる直前、オーピツは一六一七年の秋から一八年の初めにかけて、ラテン語による小論文 *Aristarchus sive de contemptu linguae teutonicae* (アリストアルコス、あるいはドイツ語蔑視に抗して) を執筆した。したがって一種の卒業制作であって、また学識者として自説を世に問う性格の文章ではない。

この論文の表題は、この時代の論述法に基づいている。すなわち“Argumentationssystem”(論法体系¹⁰)と名付けられている修辞法である。それは論述する内容および問題に関連して、文芸に携わるものすべてに共通な〈理解の地平〉を前提とした論法であり、そのためには当然のことながら、歴史的に共通な文献知識を背後に控えていることが要求されるわけである。つまり、典範となる著作家の権威による論証(“authoritative Argumentation”)であって、問題の論証のために有効な引用ないし典拠の指示が行われる。いま取りあげるオーピツの論文は二重表題(Doppeltitel)をとっているが、その前半「アリストアルコス」は、紀元前二世紀の

アレクサンドリアの文法学者である。このホメロス校訂者として著名な文献学者は、また正確で純粋な言語の厳密な守り手でも知られているところから、第一表題として選ばとられたものであろう。そして第二表題は、論文本来の目的がドイツ語による詩作の勧めであるが、まずはドイツ語そのものの〈名譽回復〉を行うとともに、言語育成の必要を訴えかけることを示している。なお、この論文の特徴は、ドイツ語擁護論であるのに、それがラテン語で著されているところにある。それはなによりもアピールの対象が、知識人層であることを物語っている。つまり、論者自身の知識教養と言語能力を提示するとともに、その論述展開の過程で、引用、典拠指示ばかりではなく、言い替えによって規範となるテクストが下敷きになっていることを示しながら説得を行っていくのである。

このような特徴を顧慮しながら、ここでは、詩論そのものよりも、論証の展開に注目してみようと思う。

『アリストタルコス』論文冒頭は、まずゲルマン人の優れていることを顕彰する。⁽¹⁾

私は、われわれの祖先である、勇敢で敗北を喫したことのないゲルマン人を思い浮かべると、静かな畏敬と強い畏怖の念に捉えられる。というのは、かの気高く自由な民は、その神にも似た勇敢さと偉業を思い起こすだけでも、私の心に恥じらいと尊敬の気持ちと呼び覚ますからである。彼らのみが戦いにおいて、世界征服者であったローマ人に対抗したのであり、

民と国土の女神、ローマ 「マルティアリス」

は、かつてはすべてのものを屈服させてきたが、どのような力にもどのような攻撃にももちこたえたゲルマンの心を征服することはできなかったのである。勇気ある英雄であったゲルマン人は、彼らの自由は城

壁や都市の見事さによるものではなく、自分たちひとりひとりの気概の護りに基づくものであると信じていた。こうした自由を彼らは、いかなる脅威、いかなる武力や圧力に対しても護り抜き、一指だに触れさせようとはしなかった。彼らはしばしばその強い腕力をもつて戦ったが、もつと多くは、不屈な気高い勇氣をもつて敵に打ち勝った。いや、古来からの雄々しい名声を思い起こすだけでも、彼らには、盾や剣を粉碎するに足る力が与えられたのである。彼らは徳と清い人倫を習いとしていたので、他の民族にあつては長い年月と苦勞の末に教え込まれたものが、生まれもつて植え付けそなえられているように見えた。このような序説に続いて、本題であるドイツ語との関連が、タキトゥスの『ゲルマーニア』の記述を反映して展開されてゆく。

彼らの生活と行動様式の真面目さには、彼らの功業に釣り合うだけの力と独特な重みにあふれた言語が伴なっていた。この言語によつて、彼らは崇高な想念を自由に無駄なく表現し、互に闘いへのときの声を挙げ、この言語によつてのみ、彼らはしばしば、稲妻のごとくに敵の威嚇を撃破したのである。こうした高邁でしかも品位ある言語は、民族の精神の息吹であるが、われわれの時代まで、混じり気なく純粹に、いかなる異物にも汚されることなく、何世紀にもわたつて保持されてきた。ここで私は強く言いたいのであるが、いかなる言語といえども、あらゆる人間の事物が運命として蒙る時を経て、これほどまでに

老齡の力と運命を越えて【ウェルギリウス、『アエネーイス』VI, 114】

長く続いてきた言語はほかにはないのである。

このような命の長いドイツ語に較べて、同じく古くからあつたギリシア語もラテン語も時の力には勝てず、

かつての勢いを失ってしまった。残ったラテン語といえども、醜い姿に変えられてしまっている(106)、という言い方をして、同時代のラテン語の用いられ方を批判する。ここでは、直接名指されてはいないが、まさしく第一表題にふさわしく、純正さ、すなわちいわゆる「Latinität」の喪失を指摘し、そのような正しい判断を欠いたラテン語観に陥つたのであれば、むしろ向かうべき道が別にあるのではないかという論法をとる。

(108) 今日われわれのひとりびとりはそれぞれ特別なラテン語観をもっているか、自分勝手にラテン語観を作り出している。どのようなことを語ろうと、黙っているのだければ、同じことなのである。サルステイウスは古くさいという評判を立てられ、死すべき者の中ではもつとも好奇心の強い人間である批評家たちの手に委ねられている。キケロは卓越した弁論家であるのに、恥じらうこともなくわかりやすい書き方をするという悪評を立てられる。同じような誹謗はオウイデイウスにも向けられる。彼こそはありとある詩人の中でももつとも優れた才能ではないか。まことにペトロ・ニウス、タキトウス、クルティウス、シンマクス、その他の古代人は月神ルーナの国に配属されるが、そこには、二日目にやつと帰ってくるといわれるエンデュミオンのほかに、今に至るまで生きた人間は夢の中でしか入り込めないのである。こうした尺度はおしなべて古典作家すべてに当てはめられる。その一方で、われわれは審判者たちの驚きに値する賞賛を浴びながら、地の息子たち「近代人」の尋常ならざる法外な語り方を仕立て上げ、また珍重している。このようにして、われわれは極めて優雅な、あのローマ人の優美さに自然にそなわった飾り(decorum)を引き剥がして、不当な被いをつけて「本来のラテン語を」損なっているのである。結局のところ、われわれは独りよがりになような美を犠牲にし、またその純潔を奪っている。[(108):]「こうし

てラテン語の純粹性(*puritas*)は次第に歩一歩と運命づけられた終末に向かつており、ちかぢか、われわれがまだそれが消え去ったことに気がつく前に消え去っていることになるであらう。[…]

自分たち自身の言語ではないラテン語に対して正しい判断がもてないならば、むしろ自国語であり、日常用いているドイツ語に対する感覚の方が自分たち自身のものであるだけに正確を期すことができるのではないか。だが現実にはそのことに気づかれていない。

(108)ゲルマンの言葉は、しかし、後世の者にとつて、心にとつての誠実さと純朴と同じように、縁遠くなることも、汚されることもなく、今日に至るまでよき友なのである。だが、われわれのうち、なんと僅かな者しか、この言葉を擁護し、洗練する試みをしていないことであらうか。あえて言わせていただくが、われわれの内の僅かな者しか善い考えを好まず、むしろ狂人のごとき行いを好むのである。すなわち、気づかぬうちに猛威を振るっている悪や、一般に広まっている迷妄を糺そうとする者は全く現れない。われわれは外国を、危険を冒し、信じがたい苦勞をして、また多大な費用をかけて渡り歩く。だが、それと同じようには祖国や自分たちのことを目に留めないような努力をしきりにしている。このようにわれわれは、際限のない欲望をもつて、外国の言い方のくせ(*idioma*)を習得する一方で、自国のものを蔑ろにして、軽蔑しているのである。「…」わが国でもすべてを手に入れることはできる。もしできない場合があるとしても、それは公共生活にとつて決して損失をもたらすわけではない、と私は思う。高価な代價を支払つてまで、新しい風習とか言葉とかを手にいれるいわれはないのだ。だからといって、私は旅行という極めて役に立つ習慣を止めるようにと言っているのではない。この上なく好ましいわれわれの祖国の尊嚴を健全

な手助けによつて保持することを切に望むのである。われわれはフランス人やイタリア人から教養(humanitatis)や雅趣を借用することに熱を上げているが、それに劣らず、彼らが自国語を入念に磨き上げ、十分に整えることを競い合っているのを目撃しているのであるから、そうしたことをわれわれ自身も熱心に心がけようではないか。

この最後の言い方は、以後も定型となり、特にクリスチアン・トマージウスの説く「フランス人模倣論」へと高まつていくことになる。さて、オーピッツは、他の国に劣らず、自分自身のものであるドイツ語を見直し大切にしようと呼びかけを続け、「われわれの言葉の精神と文の流れは、じつに優美で(decens)かつ豊か(jelich)であるから、スペイン人の威厳(majestas)にも、イタリア人の品の良さ(decencia)にも、フランス人の優美な流暢さ(venustae volubilitas)にも譲るところがない」と言つたあとで、優れたドイツ語の先例としてフィッシャルト(一六世紀の文人)を挙げ、またマルナー(一三世紀中葉の詩人)の詩を引用して見せる。(110ff.)

そしてドイツ語は「このように好ましいものであるから、われわれは自分たちの言葉に不満を感じるにはおよばない。しかも、こうした豊かな詩才が、今日に至るまでまったく途絶えていたことは、じつに嘆かわしいことである」(112)と言ひ、諸外国での自国語による文学熱高まりの状況を紹介する。

これに対して、イタリアでは数多くのペトラルカ、アリオスト、タッソーが、フランスでは数多くのマロ、デュ・バルタ、ロンサールほか優れた詩人が輩出していることは、われわれにとっては不名誉であり恥とすべきことである。またオランダ人「原文、ベルギー人」も、同じく高貴な欲求に燃え、(113)同じ高みに達しようとして、かなりの成果を挙げている。というのは、その他のものはいさ知らず、驚嘆すべき学識

をもつタニエル・ヘインシーイスによる自国語の詩があるからである。彼はそれらの詩において、自作のラテン語による詩の優美さ(eleganza)と同列であるのみならず、ある程度まで凌駕さえしているのである。われわれは目をあけながら眠っているのだ。だがわれわれは本当ならば、あの他の国民と同じ成果を上げるばかりか、同一の階調と同じような品位をもつてわれわれの詩を作り出すことができるであろう。と言うところで、同時代の詩形式を用いてもドイツ語で十分詩作が可能であることをオーピッツは自分自身の作品で証明してみせる。その際、詩形式および韻律規則についての理論的見解が述べられているところが、斬新であるが、本論での趣旨ではないので、詩論に言及することは省略する。こうした構成をとる論文の結語は、次のような呼びかけである。

この汚れなく、混じりけなく「すでに幾多の年月を経て」「ウェルギリウス、『アエネーイス』III」われわれのもとに至った言葉をこそ、もしも諸君が、君たちの祖国の空、すなわち、君たち自身に対して敵意を抱くのでなければ、この言葉をこそ愛し、磨き上げ、そのことによって君たちの雄々しさを示すべきなのだ。『:]』少なくとも、君たちがその気高い胸のうちにさめている志を、純粹な言葉によって表すこともしてほしい。君たちが両親から受け継いだ機敏な語り口を君たちの子供に残すことをしてほしい。そして最後に、君たちが勇気と誠で凌いでいる他の民族に対して、言葉の優れていることでも遅れをとらないようにしてほしい。

オーピッツが『アリストアルコス』で主張するドイツ語擁護とドイツ語詩促進の展開は、したがって、(1)これまではラテン語を用いてきたが、正しい判断が欠けてきたためによい文が書けなくなった。(2)言語に関する正し

い判断を下すには、自分たち本来の言語である母語に対する場合が一番優れている。(3)ドイツ語は古来より汚れない、好ましい言葉のまま保たれているのに、それに気づいているものは少ない。なぜなら、(4)ドイツ人は外国の言語・慣習にばかり目を向け、自国のものの価値に気づいていない。それに対して、(5)他国民は自分たちの言語を大切にし、優れた詩を書いている。(6)ドイツ人も自分自身のものであるドイツ語の良さに目を向け、それを育て上げるべきではないか。(7)しかし現状は外国かぶれによって、かつてあれほど純粹であったドイツ語は汚されている。(8)いまこそ勇氣のあるものが立ち上がって、自国語を救い出すべき時ではないか。そうすれば、他国民に負けない詩が書けるはずだ、という順を追っている。

オーピッツの執筆の動機は、ここから見る限り二つあるように思われる。すなわち、その一は、文化的先進国であるイタリアやフランス、あるいはオランダに劣らず自国語の近代文学を振興したいということであり、その二は、それにしてもドイツ語の現状は悲惨な言語混乱をきたしており、先ず文学的表現に耐えるようにするために、純化、すなわち外国語の除去をしなければならない、ということである。

こうしたオーピッツの見解を後のオーピッツの文学的位置と重ね合わせて、指導的な発言とするわけにはいかない。つまり、『ドイツ詩書』以後のオーピッツは時代の文学生産にとって指標を与える地位にいたのであるが、そうした後史から『アリストアルコス』を位置づけることはできないのである。すなわち、この書自体が反響を呼んだわけではなく、オーピッツ自身も、後にこの書のできばえを否定的に見ているということであるし、海賊版以外は版を重ねておらず、他の詩学者や詩人も言及していない。本書の文学史的意味は、オーピッツの出発点、着想がどのようなものであったかを知ることができることと、若書きであるがゆえに、かえってその当時の文

学状況の背景にある一般的傾向、あるいは精神状況(Mentalität)を反映しているものと考えることができるところにある。

四

オーピッツの執筆動機そのものは、まさしく時宜にかなっていた。というのは、オーピッツの知らないところでも、言語純化運動が始動していたからである。一六一七年には、ドイツ初の自国語擁護育成を謳った言語協会《Die Fruchtbringende Gesellschaft》(結実結社)が、ワイマルに設立される状況が醸成されていた。ただし、この動きは、学術的な動機に基づいたのではなく、貴族の広い意味での文化事業であった。手本は創始者ルートヴィヒ・フォン・アンハルト＝ケーテン(Ludwig von Anhalt-Köthen, 1579-1650)がイタリアで学んできた。彼は一五九八年から一六〇二年にかけてイタリアに遊学し、主として滞在したフィレンツェで、一六〇〇年、アカデミア・デラ・クルスタ(Accademia della Crusta一五八二年設立)に会員として迎えられた。このアカデミーは、それまで専らラテン語で行われていた学問を「庶民化」することを目的とした運動から生まれたものであった。このアカデミーの前身となった組織は、一五四一年に始まったが、一切の講演は俗語、すなわちイタリア語で行わねばならず、しかも必ず一度は『神曲』からの引用をすることが義務づけられていた。一五八二年のアカデミーはそうした活動をさらに言語純化に絞ったものであった。すなわち、そこで目指されたのは、学問を自国語の知の領域に移植し、それとともに学問を一般に広め、国民化して行くことであった。

そうした点で、このアカデミーは以後のヨーロッパにおける言語アカデミーの模範になっていった。¹³⁾

ルートヴィヒ自身にとっては外国語であるイタリア語純化のための組織に入ることが、当時どのような感覚で受けとめられたのかは判然としないが、それだけに、当時はイタリア語ないしイタリアの文化状況がドイツに対して優位に立っていたことは疑う余地がない。しかしルートヴィヒからすれば、名譽心は満足させられたかも知れないが、落ちついた立場ではなかったであろう。ただ彼はこの種のアカデミーの慣例——エンブレーム式に構成された会員名、寓意画、そして銘——と儀礼は十分学んできたのである。

一六一七年、ルートヴィヒの妹ドロテア・マリーア(Dorothea Maria von Sachsen-Weimar)が亡くなり、その埋葬に際して、故人の遺徳を忍び、悲しみのうちにも楽しみを生み出すという趣旨をもって、博学博識な宮廷武官カスパール・フォン・トイトレーベン(Kaspar von Teutleben)の発案で、八月二四日ワイマルのホルンシュタイン城(Burg Hornstein)において、親縁の貴族たち呼びかけて、結実結社が創設された。

その規約は下で触れるように、当初は親しい貴族同士の親睦会といった趣旨であって、ごく限られた範囲の貴族が会員となっていた。後にオーピッツが一六二九年に第二〇〇番会員となつてから、緩慢ながら時とともに市民出身の学者文人が会員として登録されるころになって、この結社は、ようやく文化事業としての公共性もち始めた。すでに三〇年戦争たけなわの時代であったから、結実結社は貴族によって運営されていたために、運動母体としての勢力や活動力のほどは定かではないにしても、象徴的に求心力は保たれ、ドイツの一地域に留まらず、広い範囲に影響力をもち、永続性が保証されたのである。

この会則の第一条は、会員相互の交際にあたつての社交上の指示であるが、第二条は使用言語に関する規定

であつて、

標準ドイツ語(die Hochdeutsche Sprache)をその正しい姿と状態のまま、異質な外国語を混入することなく、できる限り維持し、語るときにはもつともよい発音を、筆記や詩作にあたつてはもつとも純粹に用いるように心がけるべきである。⁽¹⁴⁾

と謳われるように、「国語の純化」が第一義におかれている。最後の第三条は会員章の規定で、全体はごくあつさりした取り決めであるところを見ると、この結社が実際に自国語の文学までも興隆する意図をもつていたかどうかはうかがい知ることはいできない。ただ、設立総会にあたつて行われた発案者トイトレーベン⁽¹⁵⁾の演説は、時代状況を反映し、戦乱下にあつてドイツ国民の自立と独立を求める考えが色濃く示されている。

流血の戦禍にあつても、われわれの極めて古くよりあり、また完全な母語、すなわち、われわれが最初の乳を飲むときに全く純粹に、いわば体内にそそぎ込まれているのに、そのうち異国の言葉の虚飾によつてふやけ、台なしにされている母語を、ふたたび始源の通常で生まれながらのドイツの純潔と誇りと始まりの姿に導き、調和の内に促進し、異質な圧力を加える言語のくびきから解放し、古くからの、そして新しい造語をもつて強固にし、こうして究極には、もつとも光輝あふれる栄光の座につけたいものである。⁽¹⁴⁾

ここに共通して唱えられているのは、ドイツ語が外国語の混入によつて歪められているので、その純粹な姿を取り戻すことを最重要課題としていることである。

自国語尊重を目的としているという点ではイタリアのアカデミーと軌を一にしているが、基準をなににとり、どのようなドイツ語を目指すのかは極めて漠然としている。イタリアの場合はそれまで規範とされてきたアリ

ストテレス哲学やラテン語による詩作と学術に対する違和感の芽生えが契機になっていた。それはやがて、自己の立場と古代およびその伝統との差異の認識を導きだし、一種の新旧論争の中に歴史意識を形成していったのである。したがって、〈古代人の模倣〉の初期段階から、やがては、そこから作り出される現代の作品の価値への問い、そしてまた新たな価値観と基準に基づく生産への展開が見られる。

結実結社の特異性は、したがって、文化の現状から必然的に、表現すべきものがあつて、その表現には自国語以外の手段を用いることはできないという動機をもっていなかったところにある。他の国ではすでに自国語を優先的に用いているのに、ひとりドイツだけはその点で立ち遅れている、そうした消極的な発想であつた。

また結実結社は、組織としても活動は限定されていた。むしろ、組織そのものの活動はなかったというべきであろう。一六八〇年の終結までに八九〇名の会員を擁したという結社としては、奇妙なことに、というか、この時代としては当然であつたというか、規約には社交作法の決まりはあるものの、総会ないし例会の場所も時期や回数も一切規定されていない。ということは、この結社は名はあるものの、その実は、会員であること、あるいは会員に推挙されることにこそ意義があつた。会員になると、ルートヴィヒは *Der Nahrrende*（養う人）、オーピツは *Der Gekrönte*（桂冠の人）というように、会員名を与えられ、身分差のない対等な関係を保つという原則があつた。たしかに、会員であることによって相互の文通は盛んに行われ、これこそが結社の活動といえることであつたが、市民出身の会員は、王侯貴族と対等でありえようはずはなく、潜在的な庇護者（マエケーヌス、Gönnern）として相對していた。

結社自体は組織的な活動を行いはしないものの、そこに所属するということが詩人や学者の格付けとなると

いう構造は、ルター派の地域においてはドイツ語純化・育成に拍車をかける結果をもたらした。こうした状況の中で、文学における自国語使用の統一的な方向を定めたのが、オーピッツであった。

彼の才能をいち早く見抜いたのは、ハイデルベルク時代に知り合った六才年長のツィンクグレーフ(Wilhelm Zingref, 1591-1635)であったが、オーピッツに〈無断で〉その詩と『アリストアルコス』を含め、『オーピッツドイツ語詩集』(二六二四)として出版した〈事件〉を起こしたのも、彼の才能を見込んだことであつたと思われる。

〈無断云々〉は一見オーピッツ・モノグラフィーに属することのようであるが、『詩書』でことさらに言及されていることでもあり、結実結社の権威を間接的に示す事例と考えられる。すなわち、次の件りである。

最近シュトラースブルクで出版された私のドイツ詩集「…」この書についていうと、その一部は数年前私自身が纏めはしたものの、また一部は私の知らぬまに他人によって未整理未点検のまま寄せ集められたものであつた。それをご覧になった方々にお願ひしたいのは、そこに見られるさまざまならぬところや誤りを、ひとつには私の若気のいたりと(その多くは、私がまだ子供といつてよいときに書いたものであることを考慮し)、そしてまた、決して悪意ではなく、それによつて私の名声を広げようと考えてくれた「DS」ひとびとのせいであると思つて頂きたい。私はここで次のことを約束しておきたい。すなわち、できるだけ早く、そのような類のもので手元にあるものをすべて何巻かに分けて、先に述べた性急な編集によつて著しく損なわれた私の名誉を救うために、公刊し、だれの手にも入るようにしたいのである。

一六二〇年一〇月戦雲がたれ込めたハイデルベルクを去るときに、オーピッツはツィンクグレーフに原稿を委

ねていった。しかもその際に、オーピッツは後段で取りあげることになる「読者にAn den Leser」という序文すら書き残している。つまり、その段階ではオーピッツも『アリストアルコス』を含めた自作の出版を望んでいたのである。ところが予定していたハイデルベルクでの刊行ができず、ツィンクグレーフは三年になってようやくシュトラースブルクで出版人を見つけた。それは当時としては名の通ったツェツナー(Eberhardt Zetzner)であつて、彼がフランクフルト書籍市目録に予告を出したことによつてオーピッツは初めて広く名を知られることになった。また『アリストアルコス』はこの版でしか伝えられていない。

オーピッツがこの版に否定的な態度をとり、一貫性がないと言明しているのも、〈謙譲のトポス〉ではなく、二〇年から二四年の間に、彼自身の詩法に基本的な変化が生じており、またそれゆえに、知遇をえたばかりのヴィテンベルクの詩学教授アウグスト・ブーフナー(Buchner, 1591-1661)の反応を慮つてのことであつた。ブーフナーは結実結社の有力会員トビアス・ヒューブナー(Huebner, 1577-1636)と親密な文通関係にあり、入会への重要な仲介者であつたといわれる¹⁵⁾。

詩法における基本的な変化とは、このちドイツ語による詩作の基本原理となる韻律法の確定である。『アリストアルコス』においては、当然のように古典文学の伝統による長音と短音を詩脚の単位としていたが、この間に強音と弱音のアクセント交代がドイツ詩の適切な韻律の基礎になることをオーピッツは「発見」したのである。このコロンブス的な発見こそオーピッツのドイツ文学史における地歩を決定的なものにし、またやがてヴェカリーンと明暗を分けた転機にもなつた。それだけに、オーピッツは自信をもっていたし、『アリストアルコス』段階が完全に過去のものであるとの主張をせざるをえなかつたわけである。オーピッツが、伝来の詩観の要約と

未成熟な詩だけをもって評価されることをおそれたことは十分に考えられる。そこで彼は急ぎそれまでに計画していた『詩書』の原稿を纏め、プレスラウでの印刷人を見つけ、ドイツの現状に即した詩論と詩法、さらにそれに基づく作品を世に問う必要が生じた。しかし読者側から見れば、夏から秋にかけて、いずれにしても新規新鮮な詩編とラテン語によるドイツ語詩論で脚光を浴びた二七才の青年が、すぐさま小冊子ながら要をえたドイツ語の詩論とその詩法を実践した作品の一端を示して見せたことは驚きであつたに違いない。

しかもオーピッツは『詩書』での約束通り、引き続き二五年にはプレスラウの同じ出版人ダーフィット・ミュラー (David Müller) のもとで自選詩集『ドイツ詩八書』 (Acht Bücher Deutscher Poematum) を出版するにあつて、ルートヴィヒに献辞を捧げる。これによつて、彼は一挙にドイツでもっとも革新的な詩論家であり詩人として脚光を浴びることになったのである。いったんはツインクグレーフによる刊行に不満の念をもらはしたものの、結局は幸運の女神がオーピッツにはほ笑みかけることになったわけであつて、両者の関係は維持される。その三年後の一六二八年、オーピッツが二度目の自選詩集 (Deutsche Poemata. Erster Theil) を出版したとき、ツインクグレーフはオーピッツにあてたラテン語の詩「君が肖像の銘として」 (In Effigiem) を献呈しているが、これはたとえ賞賛のための詩ではあつても、ツインクグレーフがオーピッツのどのような功績を評価しているのかを端的に示している。

[...]

今までドイツの若者はこの国の言葉を粗野とみなし

外国の音色を敬ってきた。

異国のがらくたを自分たちの金よりも好んだのだ。

それゆえ外国人もそう思いこんでしまった。

だが、ただひとりオーピッツが祖国の言葉の名誉を守ってくれた。

オーピッツはわれらが豎琴の最初の栄光

去るがよい、口を汚し、ローマ人の酒の澱を舐めているものどもよ。

去れと私は告げよう、ローマ人よ、去れ、ギリシア人よ

ひとりのドイツ人が君らを乗り越えようとして、やって来たのだ⁽¹⁶⁾

古代詩に則った詩型で、しかもラテン語を用いているながら、よくも「ローマ人よ去れ」と言いえたものだが、ようやく形のついた詩がドイツ語で作れるようになった喜びがここには示されている。なによりもドイツ人がドイツ語を用いて詩を作ることが美德とされている。シュトラースブルク版では付録として『その他のドイツ詩人精選詩集 *Auserlesene gerichte anderer Teutscher Poeten*』が纏められており、ツインクグレーフの自作を含め、一三名三六編の詩が収録されているが、ドイツ語を用いたという点に共通性はあるものの、詩法は不統一未整理であり、旧来の土俗的な韻律法によったものが多い。ただこの詩集の特徴を示すのは、先に挙げた編者のオーピッツ・オマージュに見られるような、ドイツ語による詩作への自負、外国の文学に対する対抗心、総じて愛国主義的な言辞である⁽¹⁷⁾。

ツインクグレーフに先立つブーフナーの賛辞「スカーツオンSeason」にも、オーピッツをもって初めて諸外国の詩に比肩しうる詩人が登場した喜びがうたわれる。これまでドイツ人は勇氣と戦いの力では敵するものを

知らなかったが、唯一その勳功を歌うものがいなかった。「優雅とグラティアの女神たちを追い求め、「…」祖国を言葉の響きをもって力強く捉えるならば、どれほど偉大な」民族になることだろうか。

それを教えるのがオーピッツのミューズだ。オーピッツのミューズは、機知に富み、学識があり、しかも甘美で、本当のミューズの女神が歌うように、多くのひとびとの口に口ずさまれる。『…』

ギリシアの詩人たちが、そしてローマの歌い手たちが、それから君たちフランスやイタリアの詩人がなにを歌おうとも（おお、精神はこのように珍しく、はかり難く神聖な奇跡をもたらずのか）、そのすべてはオーピッツの愛らしいミューズの歌うところ。お前トイト「ドイツ人」がこれから歌うことのできないものは、なにひとつとしてない。さあ、行つて名声の最高の峰をきわめよ。かつてのもつとも偉大な戦士よ、これからはもつとも優れた詩人にもなるのだ。

ドイツ人には詩文の能力があり、ドイツ語も詩作に向いている、という発言は繰り返し行われる。それはすでにシュトラースブルク版のツインクグレーフによる献辞の冒頭で刊行理由に挙げられる。すなわち、公刊第一の動機は、外国に対して彼らばかりが詩芸術に優れているのではないことをわからせ、第二に、国内のひとつには母語を用いてどれほどのことが成し遂げられるのかを知らしめ、第三には、フランスかぶれをしたドイツ人が、じつは母語を軽んじているばかりではなく、自分自身をもないがしろにしていることを教えるためとされる。

オーピッツ自身の「読者に」でも同様の趣旨が語られる。ドイツ人はいかなる国民にも技と器用さでは劣らないのに、これまでだれひとりとして母語で詩作に熱心に勤しんだものはひとりとしていない、と、まだ青年客

気の調子で始める。

続いてヘインシーイスの「オランダ語詩集」にスクリフェリウスが寄せた序文に倣って、古今各国の詩と言葉の關係に触れ、「われわれドイツ人のみが己が国への感謝を知らず、古来からの己が言語に感謝せず、まだ今のところは、快い詩がドイツ語をもつてしても語れるという敬意も表していない」と、これもオランダをドイツに入れ替えただけの、前例をなぞった展開をしている。

同じドイツ語による詩の擁護でも「ドイツ詩書」になると、「ドイツ語による詩について述べるにあたって、わが国は粗野で洗練されていない気風のもとにあるがゆえに、日の下にあるどこか別の地と同じような、詩に力を発揮しうるインゲニア（能才たち）などは産み出さない、などと考えるべきではない」（第四章冒頭）と、わずか一ヶ所だけ一種の風土論風の説明がなされている。この頃から、オーピツはドイツ語を用いなかったり、旧態然とした詩を書くこと、あるいはそうしたひとびとに対する非難めいた言辞を弄さなくなる。

一六二五年の自選ドイツ語詩集の劈頭を飾るルートヴィヒへの献辞をかねる序文では、古来より学識者の盛衰はひとえに元首や支配者の「恩顧、優しさ、意志」にかかっていると述べて、古代ローマから現代までの、君主と詩人そして詩との關係をかなり詳しく論述する。そして近代に入り、フランスではフランソワ一世の学芸振興が根を下ろし、ついには「才知あふれるフランス人である、マロ、ベレー、バルタス、ロンサールその他のひとびとが彼らの言葉に貢献いたしたために、国人から敬愛されているのは当然のこととして、異邦のものからは羨まれております」と言い、ドイツの現状に結びつける。

われわれは、ラテン語やギリシア語、そして自由学芸にやや遅れて接したものではありませんが、この上な

い学識の持ち主が豊かに増大したことによって他のすべての国をしり目に見るようになったのです。しかれば、われわれは自国の詩についても、同様の希望をもとうではありませんか。詩は今や延々と続く戦乱にもかかわらず、すでにすこぶる振興しておりますので、この面にあつても他民族を時とともに凌ぐように思われます。⁽¹⁸⁾

全体の趣旨は、詩人ひとりがいかに努力をしても、その行為を支持支援する力が働かない限り、徒勞に終わるという見解である。その意味で、結実結社はルター派諸領国においてドイツ語純化とドイツ詩産出に精神的な支持を与える点では有効な働きをした。

それでもオーピッツがただ努力しただけでは変革は成し遂げられなかったであつたらう。努力に加えるに、広く認められるに足る《言語創造》の才が必要であつた。一八世紀後半以降の文学者や文学史家からは、詩想と表現を必ずしも高く評価されないオーピッツではあるが、彼はまさしく来るべき時に来た理論家であり詩人であつた。⁽¹⁹⁾一六二五年二月シュレージエンの使節団に随行してヴィーンにおもむいたオーピッツは、皇帝から桂冠詩人の榮譽を与えられ、一六二九年には結実結社に迎えられた。二〇〇番は市民出身会員の最初であり、それまではオーピッツに対する《鑑定人》のような位置にいたブーフナーが会員になるのは一六四一年で、三二二番であつた。

オーピッツにとって詩がどのような意味をもっていたかを語るエピソードがある。

一六三〇年、後年サーディを『ペルシアの薔薇の谷』（二五四）として訳すことになる三四才のオレアーリウス(Adam Olearius)が、ライプツィヒでオーピッツと出会ったとき、記念帳への言葉を望んだところ、“Haud

possem vivere, nisi in literis vivere.”（われもし文学に生きずば、この世に生きることあたわず）と書いてくれた。その三年後、ドルバートの教授マーニウスは、そのオーピッツの言葉のあとに、*“Haud posset Germanici styli vivere elegantia, nisi in Optio revivisceret.”*（もしオーピッツの中にふたたび生をうる」となかりせば、優美なドイツ語の文体にこの命なからん）と記したということである。²⁰すなわちこの当時のひとびとはオーピッツこそドイツ近代詩の始祖と見ていたのである。

五

たしかにオーピッツの〈ドイツ詩改革〉は成功をおさめた。『ドイツ詩書』は、あとに続くさまざまな詩学書の基本となり、一八世紀のゴトシェートの時代まで規範として通用したのである。ゴトシェートはオーピッツの死後百年を記念して、一七三九年八月二〇日に、講演『ドイツ詩の父を讀え追悼する辞』を行い、同時に上梓もしている。ゴトシェートはここでオーピッツをまさしく最大級に、「ドイツのペトラルカ」と呼んで讃えたが、その主眼は「母語、詩芸術、弁論術に対する功績」におかれている。ドイツにはこれまでも数多の学識あるひとびとが出て、あらゆる分野で諸外国と競ってきた。しかしひとりオーピッツのみが、どのような学識においても偉大となれたのであり、「自己の榮譽よりも祖国の名誉を優先し、母語に尽くすということ」は他のなんびとからも期待しえなかった。まさにオーピッツこそ、他を絶する賞賛をうけるにふさわしいとされるのである。²¹

ゴトシェートが言うには、「己が祖国に母語で書き記した有用で心を高める書物をもって奉仕するひとびとこ

そ多くの名声と名譽をうることはつねに変わらない」(188)のである。オーピッツを顕彰している現在、なぜこのようなことを語らねばならぬのか、その説明がこの賛辞の後半を占める。すでに文学の言語、学術の言語もドイツ語化している時代である。

「どれほど悲惨な状況にあつて、ようやくしてわがオーピッツはドイツ語と詩をこのような高みにもたらしただことであろうか。」その道はじつに長かった。

オーピッツが「ドイツ語詩の父」と言われるのはそれ相当の理由がある。それは、彼の詩と翻訳がフレイミング、ダツハ、グリューフィウス、リストを初めとした一七世紀における名だたる詩人にとつての典範となり、また神秘思想の系譜にたつチェブコ、アンゲルス・ジレージウスたちにも多大な影響を与えたからである。⁽²⁾またオーピッツ以後、詩論や詩法に関する論文、指南書、「序文詩学」等々が記される際には、ほとんど例外なくオーピッツの名を挙げるのが慣習となっている。

それでは、結実結社が設立され、やがては市民身分の詩人たちをも会員として迎え、一見隆盛を極め、さらには各地にいかにもドイツらしく類似の言語ないしは詩作協会が設立されて行くとともに、その一方でオーピッツの詩学と詩作や翻訳が受け入れられ、次々にドイツ語を用いる詩人の数が増していったことによって、ドイツ語の使用が標準化され、ドイツ語による出版が主流を占めたかという、なかなかそうした状況にはならなかったのである。

イタリアのゲルマニスト、アルベルト・マルティーノ⁽²³⁾ (Albert Martino) は書籍市カタログ(Meßkatalog)に基づいて出版物全体に占める使用言語と詩文関係の使用言語を割り出しているが、それを図表化すると以下

ドイツ近代文学の成立とナショナリズムの誕生（轡田）

出 版 年	1653	1665	1680	1689	1690
総 点 数	1158	956	687	881	907
ラ テ ン 語	729	548	328	432	410
ド イ ツ 語	390	348	320	429	467
フ ラ ン ス 語	30	58	35	20	24
イタリア語(他)	6(3)	1(1)	4		6
神 学	506	374	224	339	358
法 学	120	90	54	97	92
医 学	65	65	69	91	87
歴史および その補助学	185	133	120	129	133
哲 学	219	240	164	168	206
詩 文	51	40	51	39	26
ラ テ ン 語	29	8	8	12	5
フランス語	1	7	8	3	
イタリア語	2		1		
ドイツ 語	19	25	34	24	21
音 楽	12	14	5	18	5

のようになる。

世紀末になっても、ドイツ語が正統主流を占めるようになっていなかったことは、クリスチアン・トマジウスがライプツィヒ大学でドイツ語による講義を予告して物議をかもした例からも明らかである。

その一方、文学関係でドイツ語が用いられるようになったとはいえ、上の表に見る限り、全体に占める比率から見ればじつに微々たるものであり、読書人層にドイツ語が与えたインパクトのほどがここから察することができる。そうした状況にあった著作家たちのいらだちはさまざまな形で読みとれるのである。

まず、ドイツ語による散文では早い時期に書かれた、ということとははや詩学には納まらぬ領域にまで筆先を伸ばすことによって、まさしく文学の世界での近代化に着手し始めたと言えることができるモツ

シエロツシュが挙げられる。

彼は一六四〇年から三年かけて上梓した諷刺小説「フィランダーの不思議にして真実の幻影」で、いわば「当世風のきわまり」といった章を設け、そのときはフランス風の髪型と髭、流行の衣装と、ドイツ風ならぬ身ごなしのフィランダーをゲルマンの英雄たちの亡霊の前に立たせ、審問をうけさせる。まず発せられた言葉は、「おお、かつてのドイツの剛毅と実直よ、お前はどこに飛び去ってしまったのか」であつた。

アイロフェスト王は私に向かって続けた。「…」お前は、フランスのおしゃべりの方が、お前の祖先の雄々しい英雄の言葉(Heldensprach)よりも気になるのか。どうしてお前は「お前が書いた」このような幻影物語の中で、フランス、ラテン、ギリシア、イタリア、スペインの単語や言い回しをまき散らすのかな。そうした言葉を全部覚えたと思われないのか。どうしてそれだけの時間をお前の母の言葉に向けなかったのだ。[…]

そうした言葉の異端信仰は、お前が自分の祖国に向かって示す不誠実の印しにほかならぬぞ。お前の尊敬すべき祖先は、お前たちがほとんどいつてよいくらい互いにしておるような言葉のごちゃ混ぜなどは決してしておらぬ。お前がこのような作品を（とにかくお前が名を挙げようと思い、まさに自由なドイツ魂の持ち主であろうとして、異邦の化粧だとかお世辞だとか、いちゃつきだとかは遠くはねつけるつもりならば）かくもありとある異国の言葉を「…」もって駄目にしておるのを見て、誇らぬわけにはいかぬであらうが。なぜかという、まことお前の大切な母なる言葉は、他のいかなる言葉にも劣らぬからだ。フランス語がそのほとんどをラテン語に起源をとつておるのに、われらが言葉は、始まりから、わが祖師トウ

イチヨの時から、正真正銘の基幹にして英雄の言葉(Haupt und Helden sprach⁽²⁾)として、独自のものであるからだ。

「…」外国の言葉を母の言葉よりも優先するか、普通の人間にはどの語かわからぬほどに混ぜ合わせることは、裏切りであつて、当然許すべからざることである。

わしと思うに、と彼は続けた、例の誠実なドイツ人たるミヒエルこそは、お前たち、つまり、ありとあらゆる異邦の、ラテン、イタリア、スペイン、フランスの言葉を昔からの母の言葉にあれこれと混ぜ合わせ、あべこべにして駄目にしてしまった言語破壊者であり、フランスの従者、書記、職員であるものどもに、ドイツの真実を語ったのだ。

異国の人間のためを思い、自分自身の安寧福利を軽んずるなどということを耳にするのは面汚しではないかな。「…」

殿さま、と私は言った、言上お許し下さいますならば、正真正銘のことをお話ししたく存じます。こうした罪は書記ではなく、殿さま方ご自身にございます。と申しますのも、殿さま方がそうしたことをお望みになられるのでございます。しかも私の身に覚えがございます。

殿さま方は、お仕えする者が、フランス語、ラテン語の単語をもつて文章を飾りたてることをいたしませぬと、無知無学と思し召されます。それも、生粋のドイツ語を用い、例のドイツ語ならぬ言い回しをできうる限り無視し、遠ざけるような立派な輩が、ものの分からぬ口バと罵られるか、お暇をだされ、先の望みが絶たれることしばしばでございます。それでございますから、善良な者がなにか小仕事^おにありつけ

ましたならば、ご主人とその顧問方のお考え通りにしないわけにはまいりません。そして、お尋ねのままにお答え申し上げます。殿さまのバイオリンのままに歌い、笛に合わせて踊り、お望み通りに書くのでございます。私は自分の不甲斐なさを責めることしばしばでございますが、なんになりましょう。私はあまりに非力でございますので、ひとりでは変えようもございません。

国王さま方や殿さま方、市参事会員や視学官方が、この大切な祖国に向けたお力と愛とをお示しになり、祖国に敬意を表し、この言葉のためになるような決まりを定めてくださり、道理に通じたドイツの学者先生がそれを尊重するようにし、またそれによい報酬を賜れば宜しきに存じます。⁽²⁴⁾

誇張はあるにしても、モツシエロツシユのとらえた当時の〈言語混乱〉の様子と元凶が如実に描かれているように思われる。こうした批判は結実結社の「殿さま方」には快哉をもって迎えられたことであろう。すでに四五年に、彼は四三六番会員となっている。

こうしたドイツ語使用の現状を別の形で伝えているのは、ハルスデルファーである。その「詩の漏斗」（初版一六四七、再版一六五〇）は、詩の書き方指南というよりは、むしろドイツ語使用の奨励、ドイツ語を用いいていかに表現するかを教える目的をもっている。オーピツの「詩書」から二〇数年を経ても、まだドイツ語が正当な市民権を獲得していない様子が、その導入部から知られる。第一書第二章にあたる「第二時間。ドイツ語について」第二節以下では次のように語られる。

二。われわれの言葉をもって正しい道理にかなう必要であることのすべてが語れることは、多くの叡智ある学者が書物をもって証明しているところであるし、また日常の経験が示しているように、人間の知能

は特定の言語と結びついているわけではない。たしかにドイツ語にするのが、ほとんど困難と考えることもある。ではあるが、それは、十分な語彙をもった言語に原因があるわけはなく、教える者の無知か、聞き手の不器用さ、あるいはこれまでわれわれがとり続けていた無為によるところなのである。

三。 もしも私が、あれやこれは正しいドイツ語にはできないのだと思うようなことがあれば、それは臆面ない思い込みである。私にわかつていないだけだからである。無知な私に他人の豊かな理解力を判断できるわけではないし、この世のだれひとりとして、さらに学んではならないなどということはない。母語は習おうと思うだけ習えばよいのである。

五。 ドイツ詩はラテン語に倣うべきであると思っているひとびとは全く間違った考えをしている。われわれの言語はひとつの基準語(Haauptsprache)なのであって、それそのものの特性によつて整えることができるが、他のいかなる法則によつても整えられない。

ドイツ語が文章語として正当に認められていないその原因のひとつに文法の不備があることに気づかれているが、一六世紀のファビアン・フランク(Fabian Frank: *Orthographia Deutsch*, 1531)以来、企てはあったものの統辞論が書かれる段階などでは到底なかった。そのような事情をふまえ、ハルスデルファーは正しいドイツ語の文を書くには、語形変化の知識を整備すべきであるとして、一六四八年の第二部には、シヨッテリウスのドイツ語論を補強する形で、付録として「ドイツ語基準・基礎語集」を記載し、二千五百語余を収録している。この五年後の第三部(一六五三)になつても、彼の努力が報いられた形跡はない。というのは、ここでの献辞は次のように始まっているからである。

自分たちおよびわれわれ自身の母語に反感をもち敵対視する人は、その高貴な詩を、使用に関しては必要、価値に関しては軽蔑すべきものと見なし、誤った用い方をとらえて腹立たしいといいます。こうした半可通の誤解に基づく意見が通用するはずはなく、また彼らの脳なしの判断にもつと理になつた有罪判決が下されるでありましようことは、われらが〈桂冠の人〉「オービツ」がその詩集の序文において、われらが〈活気の人〉「リスト」がその「天上の歌」の前書きで、またさらにわれらが〈探求の人〉「シヨッテリウス」がドイツ語論の序説において十分に記しているところであります。^(25a)

すでに一六四二年第三六八番会員「遊ぶ人 Der Spielende」として結実結社に登録されていたハルスデルファーは、当然ドイツ語の優位を信じていたが、その根拠は起源の古さと豊かな表現能力、それも語彙の豊富な点に見ていた。豊かな表現とは、初期の名著『会話遊び Gesprächspiele』に見られるように、オノマトペや言葉遊び (Wortspiel) に力点がおかれていた。一六五一年の寓意による教訓譚集『ナータンとヨータム Nathan und Jotham』には、「ドイツ語」という短編がある。

ドイツ語が他の国の標準語と長所を巡って口論し、うけた軽蔑を以下のような弁護論をもって退けた。それがしは諸君全員と競おうではないか。それがしのように自然をかくも明瞭に写しとって語り、およそ音を出すものならなんでもかでも、かくも独特にはつきりと表現できるものがあるうか。それがしはライオンのように〈ブリュル〉と吼え、牡牛のように〈ベルク〉となき、「…」雀のように〈ジルケ〉とさえずる。云々。それがしは水と会えばパチャパチャ、チュルチュルと言ひ、「…」燃える木のように、しなり、ぶん曲がり、ぱしつと言ひ、大理石にあてた刃物のようにキリキリ音を出す、といった具合に、お

よそ聞こえてくる音ならなんでも作れるのだ。

他の国の言葉はそれに負けまいと懸命になったが、およびがつかず、ドイツ語に優先権を譲らないわけにはいかなかったとさ。⁽²⁸⁾

一七世紀においてもっともドイツ語に関する仕事にかかわったシュッテリウスは、一六六三年にドイツ語論の名著『基準ドイツ語詳論 Ausführliche Arbeit Von der Teutschen HaubtSprache』を書き上げたが、その献辞でも、相変わらずドイツ語擁護論が展開されている。

ドイツ人の営みを熟考するに、「……」これほどの輝かしい、言葉豊かで、純粹な標準語「……」で見ても見事に優れており、「……」

ところで、われわれの先祖は皆め讀えらるべき偉業を成した点では幸運で能力があつたのに対して、彼らの称賛されるべき事績を書き留めることにおいては不運であつた。さらに不運であつたのは、そのような事績を母語で記し、ということとは、永遠の記録簿に記載し、後世の者が同様な徳を求めるように絶えずつき従い、思いを新たにするように目の前に提示することができなかったことである。こうしたことは、他の国民、わけても古代のギリシア人とローマ人が、よくしたところであつて、徳を渴求する若者たちに大いに役立ち、豊かに育てたのである。

学芸および諸言語は、特にドイツ人が極めて聡明に徹底して取り上げてきたが、その一方で、多くのドイツ人は自分の言葉と自分自身のことをほとんど忘れてゐる。『……』

いく人かの外国人は、その書物の中で、ドイツ人は（言葉に関していうと）粗野なうなり声を立て、錯

の出た言葉をごろごろと口にし、ごつごつした音を響かせる人間だという。それどころか、またある者が公然と書いているところによると、ドイツ語は一千語あるが、そのうち八百語はギリシア語、ヘブライ語、ラテン語からの借り物であつて、それに約二百の粗野なドイツ語があるのださうである。そして、この標準語は理解ができず、他国人にはうまく学べず、好きにもなれない言葉と言われる。

もちろんこの後には反論が続き、若いころから母語ドイツ語を用いる習慣があれば、健全な考えを初めとして、教会も学校も、法も正義も、すべてが維持され受け継がれていく、と述べられる。「われわれは、ドイツ語を通じて神のもと天国に至るのであるし、まさにドイツ語を通じて身と心を保っているのである。」⁽²⁷⁾

ハルスデルファーの主宰するニュルンベルクの「ペグニッツ花の集団」の一員であり、シヨッテリウスとともにブラウンシュヴァイク・リューネブルクの公子アントン・ウルリヒの家庭教師をつとめたジクムント・フォン・ビルケンは、アントン・ウルリヒの小説「アラメナ」(二六六九)巻頭に小説論をかねた序文を記しているが、その中で、筆をとる貴人を徳として讃え、ドイツ語で書くことの意義を説いている。⁽²⁸⁾

ドイツ人は、イタリアおよびフランスで貴族の身体訓練を習っている。しかれば、なぜ、これらの国民の例によつて、称賛されるべき芸術愛と知の訓練を習つてならないか。そしてまた今時の教皇ウルバーヌス八世ならびに多くの枢機卿、司教等も著作を恥としているであらうか。

次いでいずれの諸外国でも貴族が文筆に手を染めていると、その作品と名前が挙げられたあとで、〈模倣〉の心得が述べられる。

これらの国に旅しても、虚栄心をまねるだけで、芸術愛を習得せねばならないだろうか。またもや剣のみ

に頼り、剣とともに滅びた先祖の代の野蛮に戻ろうとでもするのか。

しかし、ドイツにもかつては詩作を行つた皇帝マクシミリアン一世がいた。そして彼の死後百年を経て結実結社が設立され、五〇年来次々と貴人がドイツ語をもつて数多くの著作を著している。

これら貴人たちは、結実結社の規約に従い、その著作をわれわれの基準・英雄語であるドイツ語によつて著している。この点で、ギリシア、ローマの模範によるばかりか、今日のイタリア、フランスその他の国のように文芸を他国語ではなく、自国語の訓練および習得に向けている国々の模範にしたがつている。われわれドイツ人が多大な金をかけて外国語を学びに旅に出て、内においては己が高貴な言語をないがしろにするのは、それ自体笑止である。なんとなれば、他国人はわれわれにこうした栄誉を与えるわけではなく、イタリア人フランス人が自国語の代わりにドイツ語を話すのを聞くこともなく、また、彼らは話し相手に自国語以外は話させず、あるいは外交団におけるがごとく、第三の言語を選ぶのである。外国人がこのように彼らの不完全でべきの悪い言葉を用いているのに対して、わがドイツ語はひとつの世界基準語でありバベルの昔よりあるのに、なにゆえに俗衆のもとに追いやられ、むしろ外国語を口まね(nachparlen)しなければならぬような負い目があるのか。それゆえ、いく人かの学者のもつ迷妄、すなわち、ドイツ語の努力、およびよいドイツ語の書物を、それがただラテン語で書かれていないというだけの理由で軽蔑する誤りに反論を加えるのは至当であらう。

ここにいう「貴人」はすべてプロテスタント、しかもルター派の王侯貴族である。彼らが自らドイツ語により、しかも「純粹、純正」なドイツ語の文章を書くことは、ドイツ語の「品位 Dignität」を高め維持するこ

とを意味していた。しかも、在来はラテン語で書かれた古典からしか学べなかったようなことが、自国語で読めるようになったことには大きい意義があると説かれる。

皇帝アウグストゥスおよびその後の時代ではギリシア語が、「神聖ローマ帝国での」ラテン語のように、学術語であり、それによって諸学芸が書かれており、習得されざるをえなかった。だが、それゆえにローマ人は彼らの言葉をなおざりにし、放棄したのであろうか。キケロやローマの弁説家はラテン語のみによって公の演説を行い、回状を書きはしなかったか。ローマ史は、またローマ法や法理はローマの言葉で書かれはしなかったか。彼らはすべての学芸の書を他国語からラテン語に移し替えはしなかったか。そしてキケロ「……」その他のすぐれた著作家で、ギリシア語ではなくて、ラテン語のみで書くといったことが誇られたであろうか。アウグストゥスやその継承者はラテン語をやめなかったばかりか、ラテン語は今では普遍的な世界語になってはいないであろうか。ローマ皇帝位がわが国民に至った後もローマ人が彼らの言葉に行ったと同じことを、われわれの言葉に対して行うことが、なぜ不正で軽蔑されるべきことなのであろうか。ラテン語は、ローマ人におけるギリシア語のように、学ばざるをえない。だが同時にドイツ語を捨てることをしないばかりか、ラテン語と同じように高め、受け入れなければならないのである。特に歴史や徳を説く書物では母語によって書かれることが必要である。婦人および学校で育てられぬものが教化のために読むことができるからである。

こうした要請を実現したアントン・ウルリヒの「アラメナ」こそは、ドイツのフマニストたちが誇りとする作品であった。ビルケンはほとんど最大級の賛辞を捧げている。「アラメナというよりはミネルヴァという

にふさわしい」に始まり、「彼女は学校の塵埃の中ではなく、宮廷で成長した。彼女は俗衆に交わって汚れることなく、極めて宮廷的に正しい王侯の態度をもつて王侯の物語を語る」と言い、そこには「宮廷と世界の鏡」が展開されると紹介する。すなわち、世を治めるものにとつての鑑でもある。だが、なによりも「ドイツのミネルヴァと言わざるをえない」ところに特徴がある。「なぜならば、彼女の飾りは、他の姫君たちとは異なり、よその国々から借りたりもつてきたものではなく、ドイツで、しかも見事にドイツ的に仕上げられているから」なのである。

結実結社やオーピッツの努力に始まり、長い道のりを、たえずどこか引け目を感じながら弁護され称揚されてきたドイツ語とドイツ語使用は、「母語」、意図するところは「主要」という「基準語 *Hauptsprache*」、偉大を示唆した「英雄語 *Heldensprache*」という名称を与えられながら、次第に詩論詩学、あるいは修辞法という理論だけに頼るのではなく、作品を舞台とすることができるようになった。他の言語に劣らない、ドイツ語も優れているのだ、という議論そのものもまた、ドイツ語の表現を磨き育成する場でもあった。そして弁護であれ称賛であれ、純粹純正なドイツ語と優れたドイツ語使用を論じることが、同時に一種のナショナリズム、すなわち言語ナショナリズムを胚胎していった。ここで特に注目されるべきであるのは、一九世紀において小ドイツ主義の母胎につながっていくことになったプロテスタンティズムがつねにその背景に控えて、国民意識を醸成していったことである。

本論文は平成六年度文部省科学研究費補助金（一般研究B）「ドイツにおけるナショナリズムの歴史的展開と現代的展望―統一ドイツ語の形成から統一ドイツにいたる国家・国民意識の変貌―」によって行われた研究成果である。

注

- (1) Vgl. Otto Dann, Nation und Nationalismus in Deutschland: 1770–1990, München: Beck, 1993 [Beck'sche Reihe 394].
- (2) ショアジヤン・ジュ・ベレエ『フランス語の擁護と顕揚』加藤英雄訳、白水社（昭一八）九三ページ他。
- (2 a) ロンサール『フランス詩法要約』高田勇訳「ユリイカ」（一九七九・六）（総特集「世界の詩論」）六〇ページ。
- (3) 中央公論社版世界の名著⑧『ルター』成瀬治訳による。
- (4) Art: Volk, Nation. In: Geschichtl. Grundbegriffe. S. 294.
- (5) Geschichtl. Grundbegriffe. a. a. O., S. 295.
- (6) Hg. von R. Alewyn. Tübingen: M. Niemeyer 1963 以下。
- (7) Joachim Dyck, Ticht-Kunst. Deutsche Barockpoetik und rhetorische Tradition. Bad Homburg u. a.: M. Gehlen, 1966, S. 42.
- (8) Ad Sigismundum Fusilius ... [An Sigismund Fusilius. Was der künftige Gelehrte wissen muß]; Ad Apollinem repertorem poetices... [An Apollo, den Erfinder der Dichtkunst, daß er aus Italien nach Deutschland kommen möge] In: Lateinische Gedichte deutscher Humanisten. [RUB 9739–45], 46f.; 54f.
- (9) 小論「十七世紀ドイツにおける近代文学形成の過程」『ドイツ近代の意識と社会』（ミネルヴァ書房 一九八七）二四一―五五ページ。

- (10) J. Dyck, a. a. O., S. 114.: "Den Zusammenhang aller derjenigen Argumente nun, die gemeinsam den Problemgehalt einer behandelten Sache umgreifen, nennen wir Argumentationssystem."
- (11) テクス・トニョ¹⁴ Martin Opitzens Aristarchus sive de contemptu linguae teutonice und Buch von der Deutschen Poeterey. Hr. G. Wikowski. Leipzig 1888 を用いた。本書にはヴィトコフスキによる『アリストアルコス』の独訳が併載されている(S. 105-118)。本稿ではこの独訳をもとにラテン語原文の表現をも加味してみた。以下カッコ内の数字は独訳のページ数を示す。
- (12) a. a. O., S. 31 (Einleitung)。
- (13) Vgl. Uwe Pörksen, Der Übergang vom Gelehrtenlatein zur deutschen Wissenschaftssprache. Zur frühen deutschen Fachliteratur und Fachsprache in den naturwissenschaftlichen und mathematischen Fächern. In: Lili 51/52(1983), 227-258. hier 242. ¹⁴ ¹⁵ ¹⁶ Oltschki, Geschichte der neusprachlichen wissenschaftlichen Literatur, Bd. 2: Bildung und Wissenschaft im Zeitalter der Renaissance. 1922, S. 172, 174 のまじりにすなわち。残念ながら「嫌アカデミー」の実体、すなわちどの程度まで学術的に構成されていたのかは不明である。というのは、もしもこの会が社会的なレビューを越えて学識者や文人までを包括して実質的な活動をしていたのであれば、ルートヴィヒの入会はその年令を考慮すれば、破格な待遇であり、また本論でも指摘するように、結実結社の運営にも反映されたと考えられるからである。
- (14) Ludwig, Fürst zu Anhalt-Köthen: Der Fruchtbringenden Gesellschaft Nahmen .. (ND Mohn 1971), nach: Wolfgang Huber, Kulturpatriotismus und Sprachbewußtsein. FlM: P. Lang, S. 243.
- (14 a) a. a. O.
- (15) Witkowski, 38; GW Bd. 166. しかし、オーピッツは第二〇〇番会員として一六二九年に入会したのに対して、ブーフナーはかなり遅く四一年三六二番目に迎えられていることを考慮すると、疑問の余地はある。シュトラースブルク版がエルザス領主に献呈されていることも考慮されるべきであろう。なお、ヒューブナーは一六一九年第二五番会員。
- (16) Lateinische Gedichte deutscher Humanisten, S. 496 [Nachwort]

- (17) (8) 参照。
- (18) Martin Opitz, *Weltliche Poemata* 1644. Erster Teil. Hg. von E. Trunz. Tübingen: M. Niemeyer ([XI]).
- (19) *Weltliche Poemata* の「編集者後書」における E. Trunz の論議。文学史におけるオーピツ評価は、ゲーテ以降の「ドイツ・リネア」の象徴表現を重要視する文学観によるものが大きい。
- (20) Opitz, *Weltliche Poemata*. 2. Tl. Hg. von R. Trunz Tbg. 1975, 97*.
- (21) Lob- und Gedächtnißrede auf den Vater der deutschen Dichtkunst, Martin Opitz von Bobertfeld, Nachdem selbiger vor hundert Jahren in Danzig Todes verblieben, zur Erinnerung seines Andenkens im 1739sten Jahre den 20 August auf der philosophischen Catheder zu Leipzig gehalten. In: Johann Christian Gottsched, *Schriften zu Theorie und Praxis aufklärender Literatur*. Hg. von U. K. Ketelsen. Rowohlt's Klassiker: Texte deutscher Literatur 1500-1800 Bd.35 1970, 121-148; hier 130.
- (22) (21) 参照。
- (23) Alberto Martino, Daniel Casper von Lohenstein. Geschichte seiner Rezeption. Bd. I Tübingen: M. Niemeyer 1978, S.31f. 44-45, 47-48, 51-52, 54-55, 57-58, 61-62, 64-65, 67-68, 71-72, 74-75, 77-78, 81-82, 84-85, 87-88, 91-92, 94-95, 97-98, 101-102, 104-105, 107-108, 111-112, 114-115, 117-118, 121-122, 124-125, 127-128, 131-132, 134-135, 137-138, 141-142, 144-145, 147-148, 151-152, 154-155, 157-158, 161-162, 164-165, 167-168, 171-172, 174-175, 177-178, 181-182, 184-185, 187-188, 191-192, 194-195, 197-198, 201-202, 204-205, 207-208, 211-212, 214-215, 217-218, 221-222, 224-225, 227-228, 231-232, 234-235, 237-238, 241-242, 244-245, 247-248, 251-252, 254-255, 257-258, 261-262, 264-265, 267-268, 271-272, 274-275, 277-278, 281-282, 284-285, 287-288, 291-292, 294-295, 297-298, 301-302, 304-305, 307-308, 311-312, 314-315, 317-318, 321-322, 324-325, 327-328, 331-332, 334-335, 337-338, 341-342, 344-345, 347-348, 351-352, 354-355, 357-358, 361-362, 364-365, 367-368, 371-372, 374-375, 377-378, 381-382, 384-385, 387-388, 391-392, 394-395, 397-398, 401-402, 404-405, 407-408, 411-412, 414-415, 417-418, 421-422, 424-425, 427-428, 431-432, 434-435, 437-438, 441-442, 444-445, 447-448, 451-452, 454-455, 457-458, 461-462, 464-465, 467-468, 471-472, 474-475, 477-478, 481-482, 484-485, 487-488, 491-492, 494-495, 497-498, 501-502, 504-505, 507-508, 511-512, 514-515, 517-518, 521-522, 524-525, 527-528, 531-532, 534-535, 537-538, 541-542, 544-545, 547-548, 551-552, 554-555, 557-558, 561-562, 564-565, 567-568, 571-572, 574-575, 577-578, 581-582, 584-585, 587-588, 591-592, 594-595, 597-598, 601-602, 604-605, 607-608, 611-612, 614-615, 617-618, 621-622, 624-625, 627-628, 631-632, 634-635, 637-638, 641-642, 644-645, 647-648, 651-652, 654-655, 657-658, 661-662, 664-665, 667-668, 671-672, 674-675, 677-678, 681-682, 684-685, 687-688, 691-692, 694-695, 697-698, 701-702, 704-705, 707-708, 711-712, 714-715, 717-718, 721-722, 724-725, 727-728, 731-732, 734-735, 737-738, 741-742, 744-745, 747-748, 751-752, 754-755, 757-758, 761-762, 764-765, 767-768, 771-772, 774-775, 777-778, 781-782, 784-785, 787-788, 791-792, 794-795, 797-798, 801-802, 804-805, 807-808, 811-812, 814-815, 817-818, 821-822, 824-825, 827-828, 831-832, 834-835, 837-838, 841-842, 844-845, 847-848, 851-852, 854-855, 857-858, 861-862, 864-865, 867-868, 871-872, 874-875, 877-878, 881-882, 884-885, 887-888, 891-892, 894-895, 897-898, 901-902, 904-905, 907-908, 911-912, 914-915, 917-918, 921-922, 924-925, 927-928, 931-932, 934-935, 937-938, 941-942, 944-945, 947-948, 951-952, 954-955, 957-958, 961-962, 964-965, 967-968, 971-972, 974-975, 977-978, 981-982, 984-985, 987-988, 991-992, 994-995, 997-998, 1001-1002, 1004-1005, 1007-1008, 1011-1012, 1014-1015, 1017-1018, 1021-1022, 1024-1025, 1027-1028, 1031-1032, 1034-1035, 1037-1038, 1041-1042, 1044-1045, 1047-1048, 1051-1052, 1054-1055, 1057-1058, 1061-1062, 1064-1065, 1067-1068, 1071-1072, 1074-1075, 1077-1078, 1081-1082, 1084-1085, 1087-1088, 1091-1092, 1094-1095, 1097-1098, 1101-1102, 1104-1105, 1107-1108, 1111-1112, 1114-1115, 1117-1118, 1121-1122, 1124-1125, 1127-1128, 1131-1132, 1134-1135, 1137-1138, 1141-1142, 1144-1145, 1147-1148, 1151-1152, 1154-1155, 1157-1158, 1161-1162, 1164-1165, 1167-1168, 1171-1172, 1174-1175, 1177-1178, 1181-1182, 1184-1185, 1187-1188, 1191-1192, 1194-1195, 1197-1198, 1201-1202, 1204-1205, 1207-1208, 1211-1212, 1214-1215, 1217-1218, 1221-1222, 1224-1225, 1227-1228, 1231-1232, 1234-1235, 1237-1238, 1241-1242, 1244-1245, 1247-1248, 1251-1252, 1254-1255, 1257-1258, 1261-1262, 1264-1265, 1267-1268, 1271-1272, 1274-1275, 1277-1278, 1281-1282, 1284-1285, 1287-1288, 1291-1292, 1294-1295, 1297-1298, 1301-1302, 1304-1305, 1307-1308, 1311-1312, 1314-1315, 1317-1318, 1321-1322, 1324-1325, 1327-1328, 1331-1332, 1334-1335, 1337-1338, 1341-1342, 1344-1345, 1347-1348, 1351-1352, 1354-1355, 1357-1358, 1361-1362, 1364-1365, 1367-1368, 1371-1372, 1374-1375, 1377-1378, 1381-1382, 1384-1385, 1387-1388, 1391-1392, 1394-1395, 1397-1398, 1401-1402, 1404-1405, 1407-1408, 1411-1412, 1414-1415, 1417-1418, 1421-1422, 1424-1425, 1427-1428, 1431-1432, 1434-1435, 1437-1438, 1441-1442, 1444-1445, 1447-1448, 1451-1452, 1454-1455, 1457-1458, 1461-1462, 1464-1465, 1467-1468, 1471-1472, 1474-1475, 1477-1478, 1481-1482, 1484-1485, 1487-1488, 1491-1492, 1494-1495, 1497-1498, 1501-1502, 1504-1505, 1507-1508, 1511-1512, 1514-1515, 1517-1518, 1521-1522, 1524-1525, 1527-1528, 1531-1532, 1534-1535, 1537-1538, 1541-1542, 1544-1545, 1547-1548, 1551-1552, 1554-1555, 1557-1558, 1561-1562, 1564-1565, 1567-1568, 1571-1572, 1574-1575, 1577-1578, 1581-1582, 1584-1585, 1587-1588, 1591-1592, 1594-1595, 1597-1598, 1601-1602, 1604-1605, 1607-1608, 1611-1612, 1614-1615, 1617-1618, 1621-1622, 1624-1625, 1627-1628, 1631-1632, 1634-1635, 1637-1638, 1641-1642, 1644-1645, 1647-1648, 1651-1652, 1654-1655, 1657-1658, 1661-1662, 1664-1665, 1667-1668, 1671-1672, 1674-1675, 1677-1678, 1681-1682, 1684-1685, 1687-1688, 1691-1692, 1694-1695, 1697-1698, 1701-1702, 1704-1705, 1707-1708, 1711-1712, 1714-1715, 1717-1718, 1721-1722, 1724-1725, 1727-1728, 1731-1732, 1734-1735, 1737-1738, 1741-1742, 1744-1745, 1747-1748, 1751-1752, 1754-1755, 1757-1758, 1761-1762, 1764-1765, 1767-1768, 1771-1772, 1774-1775, 1777-1778, 1781-1782, 1784-1785, 1787-1788, 1791-1792, 1794-1795, 1797-1798, 1801-1802, 1804-1805, 1807-1808, 1811-1812, 1814-1815, 1817-1818, 1821-1822, 1824-1825, 1827-1828, 1831-1832, 1834-1835, 1837-1838, 1841-1842, 1844-1845, 1847-1848, 1851-1852, 1854-1855, 1857-1858, 1861-1862, 1864-1865, 1867-1868, 1871-1872, 1874-1875, 1877-1878, 1881-1882, 1884-1885, 1887-1888, 1891-1892, 1894-1895, 1897-1898, 1901-1902, 1904-1905, 1907-1908, 1911-1912, 1914-1915, 1917-1918, 1921-1922, 1924-1925, 1927-1928, 1931-1932, 1934-1935, 1937-1938, 1941-1942, 1944-1945, 1947-1948, 1951-1952, 1954-1955, 1957-1958, 1961-1962, 1964-1965, 1967-1968, 1971-1972, 1974-1975, 1977-1978, 1981-1982, 1984-1985, 1987-1988, 1991-1992, 1994-1995, 1997-1998, 2001-2002, 2004-2005, 2007-2008, 2011-2012, 2014-2015, 2017-2018, 2021-2022, 2024-2025, 2027-2028, 2031-2032, 2034-2035, 2037-2038, 2041-2042, 2044-2045, 2047-2048, 2051-2052, 2054-2055, 2057-2058, 2061-2062, 2064-2065, 2067-2068, 2071-2072, 2074-2075, 2077-2078, 2081-2082, 2084-2085, 2087-2088, 2091-2092, 2094-2095, 2097-2098, 2101-2102, 2104-2105, 2107-2108, 2111-2112, 2114-2115, 2117-2118, 2121-2122, 2124-2125, 2127-2128, 2131-2132, 2134-2135, 2137-2138, 2141-2142, 2144-2145, 2147-2148, 2151-2152, 2154-2155, 2157-2158, 2161-2162, 2164-2165, 2167-2168, 2171-2172, 2174-2175, 2177-2178, 2181-2182, 2184-2185, 2187-2188, 2191-2192, 2194-2195, 2197-2198, 2201-2202, 2204-2205, 2207-2208, 2211-2212, 2214-2215, 2217-2218, 2221-2222, 2224-2225, 2227-2228, 2231-2232, 2234-2235, 2237-2238, 2241-2242, 2244-2245, 2247-2248, 2251-2252, 2254-2255, 2257-2258, 2261-2262, 2264-2265, 2267-2268, 2271-2272, 2274-2275, 2277-2278, 2281-2282, 2284-2285, 2287-2288, 2291-2292, 2294-2295, 2297-2298, 2301-2302, 2304-2305, 2307-2308, 2311-2312, 2314-2315, 2317-2318, 2321-2322, 2324-2325, 2327-2328, 2331-2332, 2334-2335, 2337-2338, 2341-2342, 2344-2345, 2347-2348, 2351-2352, 2354-2355, 2357-2358, 2361-2362, 2364-2365, 2367-2368, 2371-2372, 2374-2375, 2377-2378, 2381-2382, 2384-2385, 2387-2388, 2391-2392, 2394-2395, 2397-2398, 2401-2402, 2404-2405, 2407-2408, 2411-2412, 2414-2415, 2417-2418, 2421-2422, 2424-2425, 2427-2428, 2431-2432, 2434-2435, 2437-2438, 2441-2442, 2444-2445, 2447-2448, 2451-2452, 2454-2455, 2457-2458, 2461-2462, 2464-2465, 2467-2468, 2471-2472, 2474-2475, 2477-2478, 2481-2482, 2484-2485, 2487-2488, 2491-2492, 2494-2495, 2497-2498, 2501-2502, 2504-2505, 2507-2508, 2511-2512, 2514-2515, 2517-2518, 2521-2522, 2524-2525, 2527-2528, 2531-2532, 2534-2535, 2537-2538, 2541-2542, 2544-2545, 2547-2548, 2551-2552, 2554-2555, 2557-2558, 2561-2562, 2564-2565, 2567-2568, 2571-2572, 2574-2575, 2577-2578, 2581-2582, 2584-2585, 2587-2588, 2591-2592, 2594-2595, 2597-2598, 2601-2602, 2604-2605, 2607-2608, 2611-2612, 2614-2615, 2617-2618, 2621-2622, 2624-2625, 2627-2628, 2631-2632, 2634-2635, 2637-2638, 2641-2642, 2644-2645, 2647-2648, 2651-2652, 2654-2655, 2657-2658, 2661-2662, 2664-2665, 2667-2668, 2671-2672, 2674-2675, 2677-2678, 2681-2682, 2684-2685, 2687-2688, 2691-2692, 2694-2695, 2697-2698, 2701-2702, 2704-2705, 2707-2708, 2711-2712, 2714-2715, 2717-2718, 2721-2722, 2724-2725, 2727-2728, 2731-2732, 2734-2735, 2737-2738, 2741-2742, 2744-2745, 2747-2748, 2751-2752, 2754-2755, 2757-2758, 2761-2762, 2764-2765, 2767-2768, 2771-2772, 2774-2775, 2777-2778, 2781-2782, 2784-2785, 2787-2788, 2791-2792, 2794-2795, 2797-2798, 2801-2802, 2804-2805, 2807-2808, 2811-2812, 2814-2815, 2817-2818, 2821-2822, 2824-2825, 2827-2828, 2831-2832, 2834-2835, 2837-2838, 2841-2842, 2844-2845, 2847-2848, 2851-2852, 2854-2855, 2857-2858, 2861-2862, 2864-2865, 2867-2868, 2871-2872, 2874-2875, 2877-2878, 2881-2882, 2884-2885, 2887-2888, 2891-2892, 2894-2895, 2897-2898, 2901-2902, 2904-2905, 2907-2908, 2911-2912, 2914-2915, 2917-2918, 2921-2922, 2924-2925, 2927-2928, 2931-2932, 2934-2935, 2937-2938, 2941-2942, 2944-2945, 2947-2948, 2951-2952, 2954-2955, 2957-2958, 2961-2962, 2964-2965, 2967-2968, 2971-2972, 2974-2975, 2977-2978, 2981-2982, 2984-2985, 2987-2988, 2991-2992, 2994-2995, 2997-2998, 3001-3002, 3004-3005, 3007-3008, 3011-3012, 3014-3015, 3017-3018, 3021-3022, 3024-3025, 3027-3028, 3031-3032, 3034-3035, 3037-3038, 3041-3042, 3044-3045, 3047-3048, 3051-3052, 3054-3055, 3057-3058, 3061-3062, 3064-3065, 3067-3068, 3071-3072, 3074-3075, 3077-3078, 3081-3082, 3084-3085, 3087-3088, 3091-3092, 3094-3095, 3097-3098, 3101-3102, 3104-3105, 3107-3108, 3111-3112, 3114-3115, 3117-3118, 3121-3122, 3124-3125, 3127-3128, 3131-3132, 3134-3135, 3137-3138, 3141-3142, 3144-3145, 3147-3148, 3151-3152, 3154-3155, 3157-3158, 3161-3162, 3164-3165, 3167-3168, 3171-3172, 3174-3175, 3177-3178, 3181-3182, 3184-3185, 3187-3188, 3191-3192, 3194-3195, 3197-3198, 3201-3202, 3204-3205, 3207-3208, 3211-3212, 3214-3215, 3217-3218, 3221-3222, 3224-3225, 3227-3228, 3231-3232, 3234-3235, 3237-3238, 3241-3242, 3244-3245, 3247-3248, 3251-3252, 3254-3255, 3257-3258, 3261-3262, 3264-3265, 3267-3268, 3271-3272, 3274-3275, 3277-3278, 3281-3282, 3284-3285, 3287-3288, 3291-3292, 3294-3295, 3297-3298, 3301-3302, 3304-3305, 3307-3308, 3311-3312, 3314-3315, 3317-3318, 3321-3322, 3324-3325, 3327-3328, 3331-3332, 3334-3335, 3337-3338, 3341-3342, 3344-3345, 3347-3348, 3351-3352, 3354-3355, 3357-3358, 3361-3362, 3364-3365, 3367-3368, 3371-3372, 3374-3375, 3377-3378, 3381-3382, 3384-3385, 3387-3388, 3391-3392, 3394-3395, 3397-3398, 3401-3402, 3404-3405, 3407-3408, 3411-3412, 3414-3415, 3417-3418, 3421-3422, 3424-3425, 3427-3428, 3431-3432, 3434-3435, 3437-3438, 3441-3442, 3444-3445, 3447-3448, 3451-3452, 3454-3455, 3457-3458, 3461-3462, 3464-3465, 3467-3468, 3471-3472, 3474-3475, 3477-3478, 3481-3482, 3484-3485, 3487-3488, 3491-3492, 3494-3495, 3497-3498, 3501-3502, 3504-3505, 3507-3508, 3511-3512, 3514-3515, 3517-3518, 3521-3522, 3524-3525, 3527-3528, 3531-3532, 3534-3535, 3537-3538, 3541-3542, 3544-3545, 3547-3548, 3551-3552, 3554-3555, 3557-3558, 3561-3562, 3564-3565, 3567-3568, 3571-3572, 3574-3575, 3577-3578, 3581-3582, 3584-3585, 3587-3588, 3591-3592, 3594-3595, 3597-3598, 3601-3602, 3604-3605, 3607-3608, 3611-3612, 3614-3615, 3617-3618, 3621-3622, 3624-3625, 3627-3628, 3631-3632, 3634-3635, 3637-3638, 3641-3642, 3644-3645, 3647-3648, 3651-3652, 3654-3655, 3657-3658, 3661-3662, 3664-3665, 3667-3668, 3671-3672, 3674-3675, 3677-3678, 3681-3682, 3684-3685, 3687-3688, 3691-3692, 3694-3695, 3697-3698, 3701-3702, 3704-3705, 3707-3708, 3711-3712, 3714-3715, 3717-3718, 3721-3722, 3724-3725, 3727-3728, 3731-3732, 3734-3735, 3737-3738, 3741-3742, 3744-3745, 3747-3748, 3751-3752, 3754-3755, 3757-3758, 3761-3762, 3764-3765, 3767-3768, 3771-3772, 3774-3775, 3777-3778, 3781-3782, 3784-3785, 3787-3788, 3791-3792, 3794-3795, 3797-3798, 3801-3802, 3804-3805, 3807-3808, 3811-3812, 3814-3815, 3817-3818, 3821-3822, 3824-3825,

- München: Kösel-Verlag, Zweiter Teil, Sp. 2102.
- (24 a) Gesichte Philanders von Sittenwald. Ala mode Kherauß, in: Schöne (hg.), Barock. Die deutsche Literatur - Texte und Zeugnisse - Bd.3, 1968 München: C.H.Beck, S.51-54.; auch J.M. Moscherosch, Wunderliche und Wahrhaftige Gesichte Philanders von Sittenwalt(sic). [RUB 1871] 1986, S.145-149.
- (25) Georg Philipp Harsdörffer, Poetische Trichter. Erster Teil. 1650 [ND: 1969 WBG], S.17f. (Die II.Stund. Von der Teutschen Sprache.)
- (25 a) a.a.O., Dritter Theil, a ijf.
- (26) Schöne(hg.), Barock. Die deutsche Literatur - Texte und Zeugnisse - Bd.3, S.43.
- (27) Justus Georg Schottelius, Ausführliche Arbeit Von der Teutschen HauptSprache. 1663[ND: Tübingen: M.Niemeyer 1967] I.Teil "Ad Serenissimum Principem praefatio" (biiij-bjvr)
- (28) Die Durchleuchtige Syrerinn Aramena. Der Erste Theil: Der Erwehlten Freundschaft gewidmet. Nürnberg 1669. "Vor-Ansprache zum Edlen Leser".Xvj-XXijr.

(ドイツ文学科 教授)